

I Symbol (宗教)

1 日本神道の庭

1.1 神道の教理

巨石・奇岩に対する畏敬

日本古来の信仰として巨石である磐を磐座(イワクラ)と言って信仰していた。また巨石の配置が環状になっているのを磐境(イワサカ)と言って信仰していた。

これらは庭園ではないが、巨石の持つ永遠性の持つ神秘を感じ信仰をした。一方、日本庭園は「自然石を組み合わせることによる空間構成」に美を見出している。日本人は巨石に鑿を入れて、好みの形を作り出すのではなく、自然石を再構成した空間に価値を見出した、と思う。

磐座と言われるものは有名なものだけでも 300 箇所ある。また石に神格化を認め、石を神体とした神社は「延喜式神名帳」(927 年に指定)によれば、櫛石窓神社に始まり 103 社も列記されている。(出典『日本庭園史大系』No31 14 P)

1.2 磐座の事例を以下に列記する



湯宮神社 (長野県湯田中温泉)



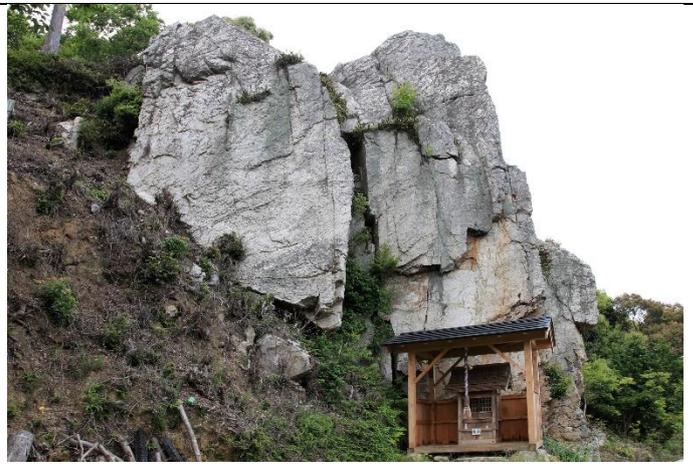
楯築神社 (倉敷市) : 磐境であり陵墓である。



阿知神社 (倉敷市)



石像寺（兵庫県丹波市）



同左



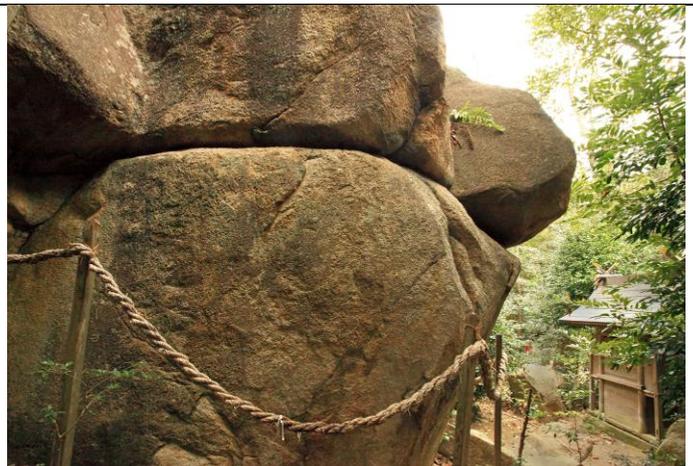
松尾大社（京都市）



同左



日吉大社（大津市）



甕岩神社（西宮市）：高さ 10m、周囲 40m



浅香つづら稲荷（伊勢市）



同左裏側の景（高さ 2.4m、幅 6mの石）



保久良神社（聖域の磐座）

聖域内の本殿周囲磐座、および境内全域も巨石の磐座がほぼ弧状になっており、古代人はそこに神秘を感じ、神と崇めた。



富士山の望む浅間神社：秀麗で雄大な山は神の宿る依り代とされた（写真提供：木下重則氏）

1.2 日本庭園としての事例

旧関山宝蔵院庭園(名勝) 場所:新潟県妙高市関山 4808 作庭時期は1478年(宗祇の連歌会)以前と推測
霊峰妙高山を荘厳する祭壇とも言うべき神聖な庭園。妙高山の神聖な湧き水を石樋で導水して滝の
上部から布滝を落とす滝を主体とした庭である。修験道の霊山を崇拝する特殊な形態の庭園である。

当庭園は庭園という言葉を使うことに躊躇するのである。滝組の背後に借景的に妙高山が見えるとい
うのではなく、妙高山そのものがご神体であり、聖水による滝組もご神体の一部である。観賞の対
象というよりも畏敬して崇拝の対照である。特殊な形態の文化遺産である。

現時点ではこのような神聖というべき庭園は他には発見されていないが、富士山、白山、御嶽山、
立山、大山などの甘南備山の周辺には新たな発見を待っているのではないだろうか。

須弥山と妙高についての文献紹介『須弥山と極楽』16頁引用 定方晟著 講談社現代新書

「須弥山の須弥というのはインド語の *sumeru* の音訳である。……。インドの国民叙事詩『マハバーラタ』に
「メール」(Meru)とあるが、文献上にこの山の現れる早い例であるが、仏教はこれを取り入れたものであろう。
そして「メール」は、インド・アリア語の美称の接頭辞 *su-*を付けて、「スメール」と呼ぶ。この意識は「妙高」
である。……。長野県と新潟県の境界に立つ妙高山は、地名辞典によれば、古い呼称の「なか山」からき
ている。「なか山」を「名香山」と書いた段階を経て、これを音読みにして「妙高山」と書きかえたも
のだそうである。」



旧関山宝蔵院

2 道教思想：神仙蓬莱思想は不老不死の願望を満たす

2.1 道教の教理

はじめに

飛鳥時代になると中国、韓国から神仙蓬莱思想が伝えられた。この思想は不老不死への願望を満たしてくれそうなので、秦の始皇帝から始まり、漢の武帝など古代中国の権力者がこの思想に熱狂した。日本でもこの思想はすぐに蔓延し、「島大臣」と言われた蘇我入鹿も池を作り、その中に蓬莱山島を作って不老長寿の儀式を行った。更に天武天皇、持統天皇にも引き継がれ飛鳥地方に不思議なモニュメントが生まれた。

この思想は人間の根源的願望を叶えてくれそうなので、今日まで影響を与えている。いわば日本人風俗になっている。

神仙蓬莱思想(仙人・蓬莱・鶴亀) 出典『図解 日本の庭』斎藤忠一 東京堂出版より抜粋

神仙蓬莱思想は飛鳥時代に入ってきたが、この思想は日本の文化に対して決定的な影響を与えた。その後、極楽浄土の庭や禅の庭などが入ってきたが、その中に必ずと言っていいくらいに鶴や亀が入っている。例えば龍門の滝の横に鶴島亀島があったり蓬莱山があったりする。須弥山も蓬莱山も関係なくなってしまう。これが日本庭園を分かりにくくしている原因だと思う。しかし、なぜこれほど神仙思想が親しまれたのだろうか。それは不老不死にあるのではないだろうか。以下に中国の神仙思想を見る。少々長くなるが日本庭園の核となる根拠について分かりやすく書いてあるので、その要点を記述する。斎藤忠一「図解 日本の庭」 東京堂出版より抜粋

渤海湾に浮かぶ蜃気楼が蓬莱山 秦の始皇帝は徐福にそそのかされて、神仙島を信じ琅邪台に三ヶ月も滞在した



蜃気楼 三つの島が融合の過程



蓬莱岩(和歌山県和歌の浦)



六義園の石組は蓬莱山の象徴

仙人とは

山中に住み、老いることもなく死ぬこともない。自分の姿を瞬時に見えなくすることも出来るし、真暗闇のなかでも、昼間のようにはっきりものを見ることが出来る。水の中に入っても溺れることなく、火に入っても焼けることもない。穀物を食べなくとも、一瞬にして千里を走ることが出来、鳥のように空を飛び、天に到ることもできる。……………と思いつく全ての条件を備えている。

このようなスーパーマンには誰でもがなりたいものだ、それが修行しだいで誰でもなれるという。と、言うのは自然界を見れば人間以上に長生きしている動物や植物があるではないか。その動物などをよく観察すれば神秘の理法が明らかになる筈だ。例えば鶴や亀は首を長く強く伸ばし、手足もよく屈伸する。これは体内の障気を吐き出しているに違いない。このように動物の動きを取り入れた体操をすれば長生きが出来、一瞬にして妙薬も作り出すことができる、と考えた。

天地一切の存在は、全て宇宙の根源である霊妙なる「気」から出来ている

人の身体も精神も「気」から出来ている。ただ身体は形が見えるようになっていて、精神は形が見えないだけ。身体は形が滅びるようにインプットされている。すなわち老衰、疾病、霊障である。その原因は頭部、心臓、臍下には三尸虫(さんしちゅう)という虫が住んでいるからである。となると、この虫を追い出せばよい。そういえば鶴や亀が首の屈伸をするのはこの虫を追い出しているではないか。

穀断(こくだち)と仙薬

三尸虫を駆除するためには虫の餌になる五穀(米、麦、粟、黍、豆)を断てばよい。しかし穀断をすれば虫も弱るが、我々人間も栄養失調になり、やがて生命の危険に陥る。それならば五穀に代わって生命の「気」を養い三尸虫の餌にならないものは何か、である。あった、それは服餌(ふくじ)といってキノコ、松の実などである。いわゆる漢方薬の類で仙薬と、いう。

名山と作薬

五穀を断って仙薬を服し、気を養生すれば仙人になれる。しかし肝心の仙薬なるものは、どのようにし入手するのか。仙薬の材料を集めて作薬することこそ、仙人になるための究極の手段である。仙薬になる薬草や鉱物はきっと大山にある物が良

いに違いない。なぜならば、大山には力強い霊力を持った正しい神がいるから作葉をその霊力で手伝ってくれるに違いない。作葉には絶対に洞窟が必要である。精進潔斎して精思し、山の神の力を借り作葉する。大山には深山幽谷があり、仙葉の材料が豊富で、洞窟もある。

材料が豊富で洞窟の多い場所

作葉をする場所としては大山として五山(泰山、衡山、崑崙山、恒山、嵩山)が有名である。

海上の十大州(瀛州(えいしゅう)、祖州、玄州、長州、など)が良いとされた

四島にも仙葉が多く仙人がいる(方丈州、蓬萊州、滄州、扶桑州)

上記瀛州、方丈州、蓬萊州は庭園では三神山として登場する

秦の始皇帝(前 259～前 210)により神仙蓬萊思想が定着した

前 221 年天下を統一して三年後、彼は首都の咸陽を出発し、泰山に登り封禪の儀を行った。この後山東海岸で遊んでいる時、方士の徐福が取り入り仙人探しを次のように誘った。

「東海の渤海の中には蓬萊、方丈、瀛州(えいしゅう)という三神山があります。……………そこには、もろもろの仙人や仙葉が全部揃っており、住まっているものは、鳥獣までが白一色で、宮殿楼閣は金銀で出来ているとのことです。……………是非とも私どもを三神山へ遣わして、仙人や仙葉を求めさせていただきたい。」

始皇帝は徐福たちの希望を聞き入れ金と人を与え、海上に遣わした。その後徐福のようなおもねりへつらう輩の言う事を多く聞き入れた。しかし、現実にはあり得ないことなので方士たちはその都度出まかせを言った。始皇帝は 10 年間も山東半島にありえない幻の夢を追い続け、遂に 50 歳の時に仙葉探しの船旅で病を得てなくなった。

漢の武帝が鶴亀蓬萊庭園を発生させた(海中の神仙山を亀の形に作る)

漢の武帝(前 156～前 87 年)も神仙思想に没頭した。方士の李少君は武帝に次のように言った。

「竈の神を祭れば、神霊を招くことが出来、神霊を招致することが出来れば、その力を借りて、丹砂を化して黄金とすることが出来ます。その黄金で食器を作って食すれば、寿命を延ばすことが出来ます。寿命が伸びれば海中の蓬萊山の中に住む僊人(せんじん)にも会うことが出来ます。僊人にあつてから封禪の儀を行えば、もう死することはありません。……………」

など夫々の方士はでたらめを言うが、武帝は、次から次と繰り出してくる方士達の虚言を実行する。そして晩年には大液池と名づけた池の中に蓬萊、方丈、瀛州、壺梁の四島を築いた。池の中には漸台という水の中から立っている建物と、亀や魚の形をした石組みのようなものが配置された。いよいよ神仙蓬萊庭園の発生だ。この漢時代の思想は唐時代に日本の飛鳥に伝わった。島の大臣が登場する。

なお、日本庭園で神仙島ではなく陸上部に神仙山がある場合は、崑崙山か古来より名山として篤い信仰を受けている泰山を表している、とのこと。

亀が神仙山を背負うの伝説

戦国時代初期の「列氏」の中に次のような神仙島の記述がある

「渤海の東、どれほど遠い距離があるか分からないが、大きな谷がある。その他には底なしの谷で、帰虚と呼ばれている。……………その谷の中に、岱輿(たいよ)、員僑(いんきょう)、瀛州(えいしゅう)、方壺(ほうこ)、蓬萊という五つの神仙山がある。……………五神山は、根元のほうでは連っていないので、常に波の間に、上がったたり下がったりして漂い巡って、少しの間もじっと停止していることがなかった。このように神仙山が定まらないのに困った仙人たちは、そのことを天帝に訴えた。すると天帝は神仙山が宇宙の果てに流れ去って、仙人たちの住むところがなくなってしまうのを心配して、北極を司る愚彊(ぐきょう)という神にその対策を命じた。愚彊は、大きな亀 15 匹に、頭をもたげて神仙山を背負い、漂い巡らないようにさせた。ところが、北の果ての国に童伯という大男がいて、数歩にして帰虚に至るといほどの巨人であった。この男がある時、帰虚の谷で釣りをして、6 匹もの大亀を数珠つなぎに釣りあげて、それを担いで北の国へ持ち帰り、その甲羅を焼いて占いに使ってしまった。二島の大亀がいなくなったために、岱輿(たいよ)と員僑(いんきょう)の二島が北の果てへと流れていって、大海原に沈んでしまう」。以上によって、亀が蓬萊山などを背負う、という神話が成立していたことが分かる。この神話が武帝の時代に庭園の中に再現されたのである。

では何故このような神話が発生したかの背景を探ると、渤海湾には蜃気楼が発生するからだ。じっさい蜃気楼は方士たちが言い逃れで言っているように、神仙山は遠くから見るとユラユラ漂っていて、そばに行くと消えてしまう、というのも無理もない。

2.2 道教の神仙蓬莱思想と鶴島・亀島庭園
飛鳥時代の石造物



飛鳥京跡苑池



亀形石造物遺構 聖なる亀により天皇の不老長寿を願った



橘寺付近にある亀石だが、本来は路傍の石ではないはず



石舞台の石棺の天井を覆う石は、機能的にはこのように厚くする必要はないが、不老不死の亀を象徴した石と考えると、神仙蓬莱思想が確実に信仰されていた証拠といえる(齋藤忠一氏指摘)。



須弥山といわれている



胡人風の像

道教の神仙蓬莱思想と鶴島・亀島庭園

庭園における不老長寿の具体的な形としての鶴島・亀島と蓬莱山の例は枚挙にいとまないが、その一例を示す。



苔寺の亀島(白桜島)



苔寺の鶴島



金閣寺 : 左の島が鶴島、右が亀島。因みに池中には亀島は5島、鶴島が3島ある。(左視野外の葦原島が蓬莱山)



深田家 : 池の中にある左側が亀島、右側が鶴島 (右側視野外の三尊石組は蓬莱山)。



龍安寺 : 左端ブロックが鶴島、壁際の山形の石が蓬莱山、右端のブロックが亀島。



金地院: 左側の石組が亀島(左側より亀甲石、亀頭石)、中央石組が蓬莱山、右の石組が鶴島



西本願寺: 亀島(左)、鶴島(右)で中央の反り橋の背後の石組が蓬莱山。



旧秀隣寺: 左の石組が亀島(立石が亀頭石)、中央奥が蓬莱山、右が鶴島(特に羽石一石で鶴を象徴)。



東福寺普門寺: 右側石組が亀島(洞窟が二か所ある)で、左側が鶴島。立石が羽石でもあるが蓬莱山(須弥山)でもある

3 極楽浄土:地上に極楽を作る

3.1 極楽浄土と末法思想の教理

「浄土教」と「浄土宗」とは別物ではなく、「浄土教」は「浄土宗」のほかにも浄土真宗、時宗を含み、さらには天台宗や真言宗、禅宗などの中にある浄土信仰をも含む広い概念とすることができる。

「極楽浄土へ往生するには、阿弥陀仏を信仰すればいい」という考え方が、末法思想と一緒にあって、**浄土教が大流行**していった。「往生要集」は極楽へ行くための要点が書かれた本、要するに念仏往生のマニュアル本であるが、これは10世紀後半に僧・源信（恵心僧都）によって書かれた。これが普及することによっても、浄土教はもっと人々の間に広まった。

『往生要集』源信著（942～1017）：985年成立。極楽往生に関する重要な文を集め、念仏の要旨と功德を示したもの。日本の浄土教の思想的基礎となった。

a、時代背景

インド、中国で末法思想が生まれたが、わが国では古代国家の崩壊過程進行に伴い社会・政治情勢の不安が広まった。10世紀末から11世紀にかけ、摂関政治の行き詰まりと天災や疫病に脅やかされていた貴族たちは、密教や陰陽道などの呪術にすがって現世利益を求めただけでは足りず、浄土信仰によっても日々の不安から解放されようと願った。こうした時代の風潮と相まって末法思想が広まっていった。

b、正法・像法・末法の期間についての諸説

時代		A 説	B 説	C 説	D 説
正法	教・行・証の三法が行われる	500年	500年	1000年	1000年
像法	教・行はあるが証果が得られない	500年	1000年	500年	1000年
末法	教えのみがあり行・証もなく末法になる	1万年	1万年	1万年	1万年

c、日本での末法は

実際の釈迦の生涯について、一般的には紀元前565年～486年または紀元前465年～386年である。しかし日本では平安時代中期より、釈迦の入滅時を前949年として、正法・像法各1,000年（D説）とし、その結果末法は1052年（永承7）に迎える、との説が広く流布された。その結果、この時期前後から末法から逃れるために浄土信仰が盛んになる。なおキリスト教にも終末思想がある。

d、浄土信仰

末法意識に思想的根拠を与えたのが、源信の『往生要集』であった。院政期から鎌倉期にかけての武士・僧兵らの横暴、相つづく天災・戦乱・飢饉により、時代が經典に説かれる末法の様相と一致したことは、人々に末法の到来を現実のものと意識させた。末法到来の危機感は、末法意識を基底にした仏教の展開を促すことにもなり、法然は称名念仏をすすめ、その弟子親鸞は絶対他力を強調した。日蓮は末法に得脱するには『法華経』の題目を唱えること以外にないと説いた。これに対して道元は仏教に正・像・末を立てることを一つの方にすぎないと、末法仏教を批判した。

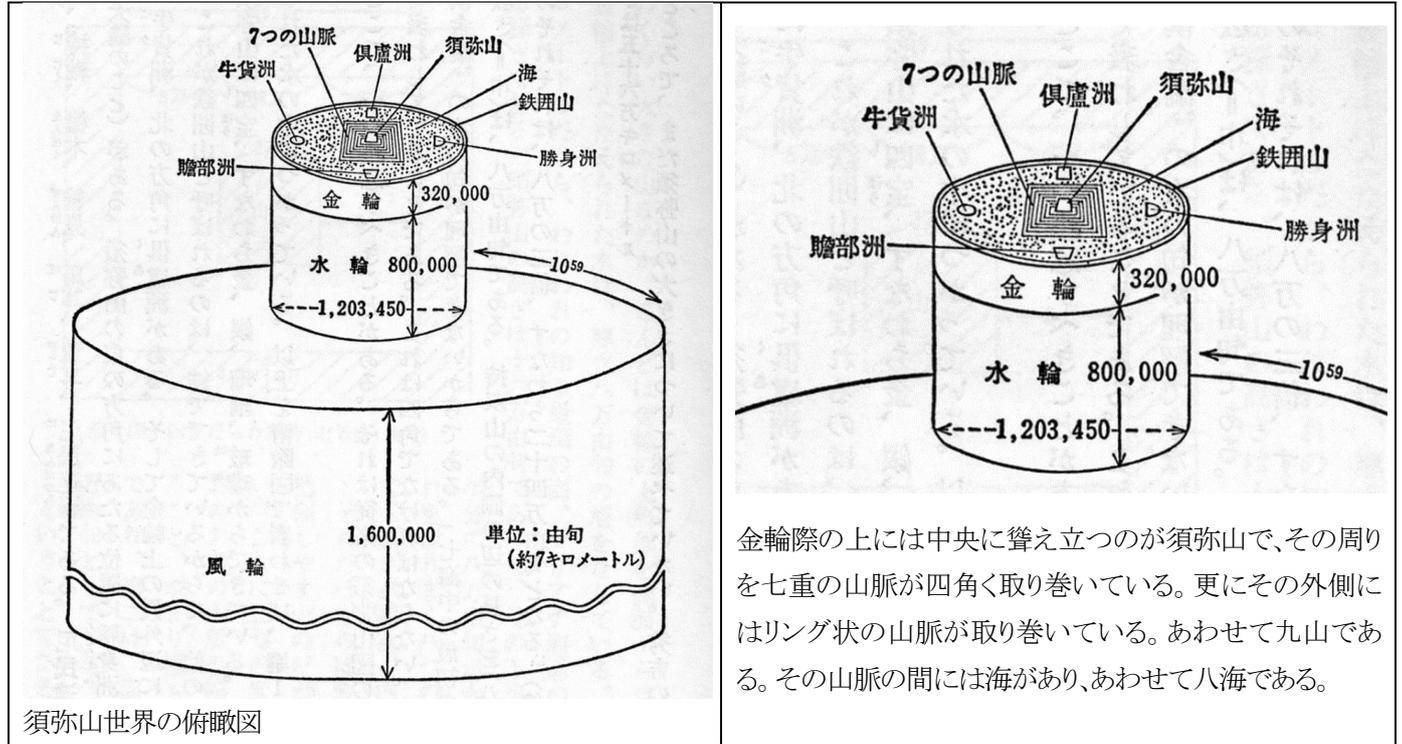
e、極楽へ行くための手っ取り早い方法は、この世に極楽を再現する

極楽へ行くためには「観無量寿経」では定善十三の観法がある。極楽世界の細部から思い浮かべ、目の前にありありと見えるまで修行せよ。そうすれば最終的には極楽の蓮華の中にいる自分が見えてくる。そのためには寝ても覚めても極楽が見えるように訓練する必要がある。想像力で現実を作ってしまうのだ。

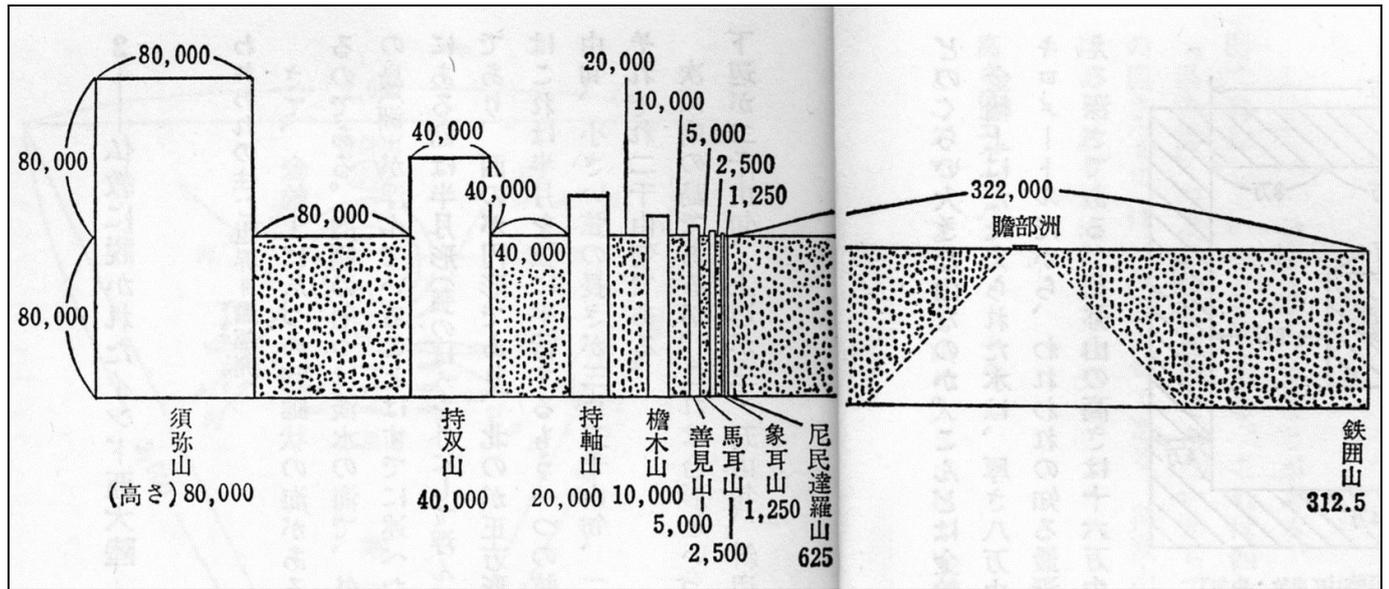
しかしこれでは非常に手間が掛かる、何か安直な方法がないのか。あるある、地上に極楽を作ってそれを見続ければ、極楽世界が目の当たりに浮かんでくる、という。道長は62歳で糖尿病で死んだそうだ。美食の果てに目が見えず、好きなものも食べることが出来ず最後を迎えた。

3.2 九山八海と須弥山の教理

インド五世紀の仏僧ヴァスバンドゥの「俱舍論(くしゃろん)」による転生輪廻の世界論では九山八海をおおよそ次のように述べている。出典『須弥山と極楽』 定方晟 講談社現代新書。また、源信の『往生要集』には瞻部洲の下にある地獄の構造とその一つである「衆合地獄」の一部を最後に紹介する。



金輪際の上には中央に聳え立つのが須弥山で、その周りを七重の山脈が四角く取り巻いている。更にその外側にはリング状の山脈が取り巻いている。あわせて九山である。その山脈の間には海があり、あわせて八海である。



須弥山を取り巻く八つの山脈と八つの海の断面図

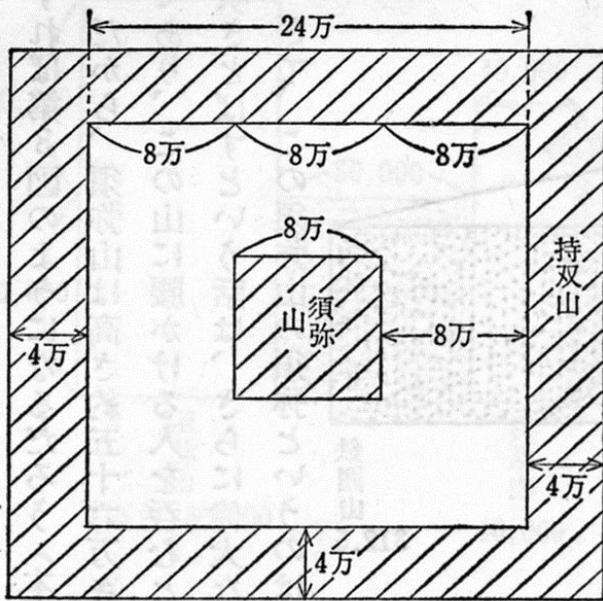
①同心方形の金の山脈が七つあり、それを内側から列記すると:

持双山・持軸山・檐木山(えんぼく)・善見山・馬耳山・象耳山・尼民達羅山(にみんだつら)

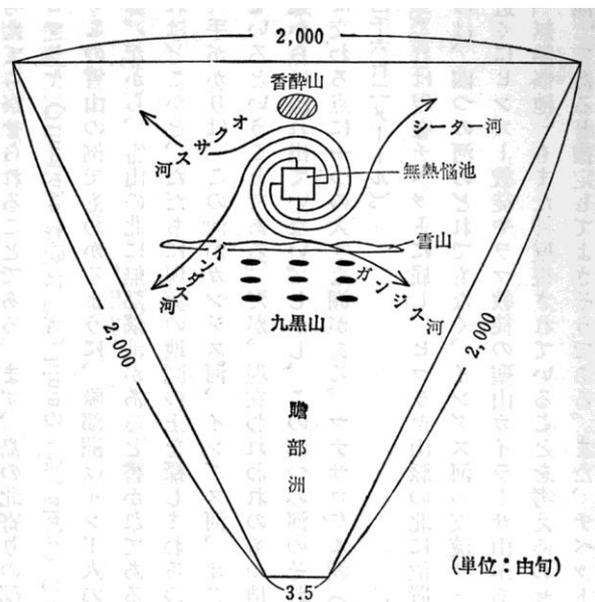
②最も外側の山脈は鉄からできた環状の山脈:鉄圀山(てっちせん)がある

③各山脈の間には海がある

④外側の山脈の尼民達羅山(にみんだつら)と鉄圀山(てっちせん)の間の海には四つの島があり、東には半月形の勝身洲(しょうしんしゅう)、南には台形の瞻部洲(せんぶしゅう)またの名を閻浮堤(えんぶだい)、西には円形の牛貨洲(ごかしゅう)、北には方形の俱盧洲(くるしゅう)がある。

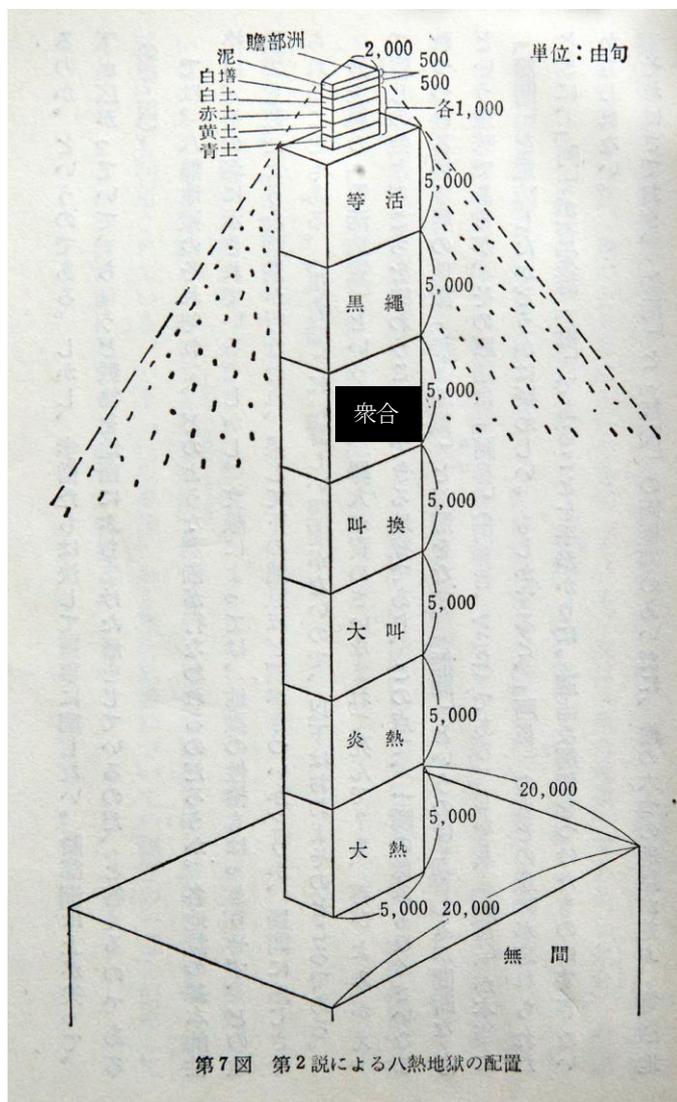


須弥山を取り巻く七重の山脈は方形であった。
従来は螺旋形であるとも解釈されていたため、北畠神社のように庭園の意匠としては、螺旋形の場合がある。



贍部洲はインド大陸を表している
北部には香水山があり、そこには様々な香りのする樹木が茂っている、と言われている。現実の山はカイラーサ山に相当。一方無熱惱池はマナサロワール湖に相当。

八大地獄の構成 (『須弥山と極楽』定方辰・講談社現新 41P)



第7図 第2説による八熱地獄の配置

上段右にある贍部洲の地下に八段階の地獄がある。
源信が上から三番目の地獄を描いた一部を右欄に記す。

衆合地獄の様相 (『往生要集』花山勝友著・徳間 55P)

【…また、鬼は、この地獄に落ちた罪人をつかんで、刀のように鋭い葉をした木の林に入れます。木の上を見ると、素晴らしく美しい女性がいます。そこで木を登ってゆくと、葉が刀のようにその罪人の身体や筋肉を切り裂くのです。このように身体中を傷つけながら、やっと木の上に登ってみると、さっきの美しい女性は、地上にいます。相手をとろかすような目で罪人を見ながら、次のように云います。「あなたを思うからこそ、私は下に降りてきたのですよ。どうして貴方は、私のそばに来て、私を抱いて下さらないのですか」

罪人はそれを聞くと、再び猛然と欲望が起こってきて、下に降りはじめます。すると、木の葉が全部、まるでカミソリのように鋭くとがって上に向くのです。登った時のように、身体中を傷つけながらやっと地面にたどり着いてみると、美女はまた木の頂上にいるのです。罪人はそれを見て、再び木に登り始めます。

このように、数限りない年月の間、自分の欲心に惑わされて、この地獄の中で、このように苦しみを生けるのは、正しくない性欲が原因です。地獄の鬼は罪人を叱って次のような詩を述べます。

「他人の成した悪い行為で、自分が苦しい報いを受けているわけではない。自分で成した行為によって、自分がその報いとしての結果を受けているだけなのだ。人間と云うのものは、皆このようになっているのだぞ」…】

3.3 極楽浄土の庭

3.3.1 洲浜・出島（庭園における洲浜の造形は単なる自然の写しではなく、栗石の洲浜は極楽の象徴）

作庭記で「すはま形は、普通の州浜の様にするのである。但しあまりきちんと紺の紋などの様になるのはよろしくない。同じ洲浜形であるけれども、或いはひきのばしたように、或はゆがめたように、或いは背中令わせにうちちがえた様に、或いは洲浜の形かに見えるけれども、やはりそうではない様に見えるなければならない。これに砂を散らした上に、小松などを少々植えるが良い。」とある。



東院（奈良時代）既にデフォルメされた造形が作られていた



平等院（宇治市）；此岸より州浜で囲まれた彼岸を望む



平等院の側面より平橋と反り橋を望む



浄瑠璃寺（京都府）



毛越寺（鎌倉時代）



西芳寺（鎌倉・室町時代）：洲浜は立体的な出島になるが、護岸は当初は土を盛り上げただけの「土波」が主体



天龍寺 書院からの景：立体的な出島にするために、護岸には石組されるようになった。この石組により庭園には奥行くが出るようになった。



桂離宮（江戸時代）栗石による洲浜と天橋立



桂離宮 中島にある洲浜と月波楼からの景



仙洞御所（江戸時代）小堀遠州によるデザイン化された洲浜（直線的な洲浜の造形と自然石と切石による護岸石組）



光明院 毛越寺の干潟模様を発見した重森（S14）による枯山水の洲浜（近代枯山水の原点）



松尾大社（S50） 重森による互いに入り組んだ洲浜

3.3.2 九山八海と須弥山

① 九山八海のモデルと考えられる実際の景色：カイルス山(6714m) と無熱惱池＝マナサロワール湖(4588m)



香醉山 = カイルス山(6714m)



無熱惱池 = マナサロワール湖(4588m)

② 庭園における象徴的な九山八海の例



金閣寺(鹿苑寺)の九山八海石は一石で全体を象徴



東福寺(霊雲院)にある九山八海の象徴

③ 庭園における須弥山の例



平城京宮跡・東院



毛越寺 (岩手県)



天龍寺：九山八海の原型か (右側の大きな立石が須弥山で、そこから左回りの螺旋状に八石があり合わせて九山)



北畠神社 螺旋状の石組の中心には鋭い形をした須弥山石がある



酬恩庵廟前庭園



萬福寺（益田市）：築山の頂上にある石が須弥山を象徴



久留島家：中央にある四角錐の石（ピラミッド型）が須弥山を象徴し、その右下から右回りの螺旋状の石は九山八海を象徴

3.3.3 三尊石組の系譜

三尊仏は一般的には仏像、仏画で中央の中尊と左右に侍立する脇侍(きょうじ)の総称としてつかわれる。中尊によって脇侍が異なるが、以下のような三尊仏がある。

阿弥陀三尊: 阿弥陀如来、観音・勢至菩薩

釈迦三尊 : 釈迦如来、文殊・普賢菩薩

薬師三尊 : 薬師如来、日光・月光菩薩

不動三尊 : 不動明王、金伽羅(こんがら)・制た迦(せいたか)童子

庭園においては上記のような**宗教的尊像**としてよりも、**変化がありながら形が安定しているから**、ほとんどの庭園で採用されている。『山水並野形図』の著者・増円による定義では万福寺の石組みが最も適合するが、一般的には三石が並んでいれば三尊石と言われている。以下に庭園における三尊石組の例を示す。



左京一条三坊十五坪 (奈文研に復元展示)



苔寺：金閣寺、銀閣寺などの三尊石の基準となる



鹿苑寺(金閣寺)：葦原島の三尊石と台座石



慈照寺：白鶴島の三尊石(東求道より撮影)



保国寺(西条市)：三尊石は枯滝上部に二組ある



小川家(江津市)



深田家(米子市)：燃え立つような三尊石と築山の石組は不老不死を象徴する蓬莱山を示す



万福寺 (増円の定義の様に人目につきにくい場所、ずんぐりした形、中尊石の高さは約90cmである)



朝倉遺跡(湯殿跡)



普賢寺(三尊式枯滝・光市)



二条城：三尊石は右寄りから見ると、羽石にも見える



天赦園 (愛媛県)



向嶽寺 (山梨県)



円徳院



東海庵



本法寺: 本阿弥光悦の絵画的三尊石 (中央右側立石は宗祖親鸞を象徴、左側立石は開祖日信、両立石の中央に倒れた黒い石と併せて三尊石石組。青紫の虹色の石は、下流にある滝落石のようであるが、単なる自然の滝ではなく日蓮宗の法話を象徴していると思う。



福田寺 (米原市)



青岸寺 (米原市)



金地院：鶴島の三尊石



金地院：亀島の三尊石組（亀甲石部）

4 禅宗

4.1 禅宗の伝記および教理

鎌倉時代になると禅宗が中国から入ってくる。その決定的な人物は蘭溪道隆で、北条時頼により建長寺の開山となり、完全な中国式の禅宗が確立された。また蘭溪を心の師とした夢窓は龍門瀑の庭を作ったので概略述べる。

臨濟宗の禅の悟りとは

自分が清浄身であることを自覚する、ことである。そのためには方便として周りを塵一つない環境にする、ことである。これを称して**禅觀境を無染にする**、と言う。そのためには一に掃除二に掃除である。

この精神から発している禅寺の庭園は塵一つなく、水が打ってあり、凜として厳粛である。

禅の道場の造形や禅の庭は禅宗の經典を視覚化する

龍門瀑とは

天龍寺や金閣寺などにある。ともに中国の故事にある「登龍門」の由来である鯉が、三段の滝を登って将に龍に化す様を現している。中国南宋よりの帰化僧の蘭溪道隆禅師が中国の故事にある登竜門（鯉が死を賭してまで竜になるべく努力するさま）にならって、修行僧が観音の知恵を得る（悟る）まで、努力をしなければならないことを日本庭園の形で教えている。このテーマを夢想国師が引き継いで新しい庭園のスタイルを確立した。これにより鎌倉、室町時代の庭園はメインテーマが龍門瀑になる。

4.1.1、蘭溪道隆が始めて龍門瀑を作る（1213～78）

伝記（斉藤忠一「図解 日本の庭」を引用）（建長寺・円覚寺 週刊古寺をゆく 小学館より引用）

蘭溪道隆は中国四川省涪江（ふうこう）郡蘭溪村出身。13歳で出家の後、径山の無準師範、天童山の痴絶道中、台州の北礪居簡などに参じ、最後に臨濟宗松源派の無明慧性に印加を得ている。そのころ南宋には多くの日本の留学僧が学んでいたが、京都泉涌寺の月翁智鏡（げつとうちきょう）にあつて日本に興味をいただき、来日を決意した。彼が博多に到着したのは1246年で34歳のとき。到着後、博多の円覚寺や佐賀の円通寺にしばらく滞在した。翌年上洛するために円通寺を出て、途中大分県の九重町で滝に出会い「龍門の滝」と命名した。そして滝の正面に龍門寺を創始して、弟子の南岳をここに残して京都に発ったという。京都では月翁智鏡をたよって泉涌寺へ入るが、翌年の1247年鎌倉へ向かった。鎌倉にはすでに栄西によって臨濟宗が紹介されていたが、道隆は先ず栄西の開いた寿福寺に赴き、宋への留学経験のある大歇了心（だいかつりょうしん）に参じた。その後、執権北条時頼にあつた。二人の出会いは、その後の日本臨濟宗を決定づけることになる。翌年より建長寺の創建に参画し、開山第一祖として入寺した。蘭溪40歳であった。その後時頼の崇敬ますます篤く、後嵯峨天皇の勅を受けて上洛し御前で禅の要諦を説いた。しかし彼の盛名を嫉妬してか、他宗派からの誹謗や圧力が激しくなり、ついには元寇のスパイ説まで飛び出した。彼は鎌倉を出て甲斐、信濃に二回にわたって都合11年間逃避行した。この間、彼が東光寺を初めとして龍門瀑の庭園を作った。この時点から日本の庭園が従来の神仙蓬莱式庭園や極楽浄土式の庭園から禅の思想に基づいた庭園が始まった。

省行文と龍門瀑（斉藤忠一「図解 日本の庭」より引用） 蘭溪は建長寺の建立に当たり、諸事講式や規矩（きく〜規則）を定め、多くの法語を發した。その中に『大覚禅師省行文』がある。雲水や参禅者の日常の心構えを懇切丁寧にといたもので、その中に龍門瀑のことが書いてある。長文であるので、その部分だけを意識してみる。

曹洞宗の開祖となった洞山和尚は、出家してから一度も故郷に帰らず修行をした。そのくらい熱心に修行すれば、必ず益があつて悟りを得ることが出来る。青蘿（青いつた）だつて喬木の勢いを得て千尋の大木となつて聳えることが出来る。「紅尾（鯉）は禹門の波と競つて、争つて三級岩を超える」という。鯉魚さえも、禹門が切り開いた龍の激流に向かつて、争つて三段の滝を越えようとする。無情の青蘿だつて、自らの意志で高くよじ登ろうとする。鯉魚は滝を登りきつて、大空を飛翔しようとする。

ましてや人として、雲水は信念を篤くして修行に徹しなければならない。志を堅く持つて、悟りを得ることが出来ないなど決して思い患うな。修行は外に求めるものではない。自ら振り返つて、自分のうちに求めるものである。

庭園に龍門瀑のテーマを採用したのは蘭溪道隆が最初である。甲斐の国の東光寺にその伝承がある。このテーマを

引き継いだのが夢窓疎石で天龍寺、西芳寺である。以後、鹿苑寺、慈照寺などへと継承されていく。このようなわけで鎌倉・室町時代の庭園のメインテーマは滝になる。

蘭溪道隆（1213～78）を心の師とした夢窓疎石（1274～1351）

夢窓は紀州由良興国寺の法燈国師に参禅しようとして甲斐を出発したが、京都で知人の奨めで建仁寺に入り、無隠円範（むいんえんぱん）禅師に参禅することになる。20歳であった。翌年鎌倉に下って、東勝寺に入り無及徳詮に就き、さらに建長寺に入って葦航道然（いこうどうねん）に参禅した。翌年は、円覚寺に移って桃溪徳悟（とうけいとくご）に参じ、更にまた建長寺に変わって痴絶空性（ちぜつくうしょう）に参じた。翌年はふたたび京都に戻って本師の無隠円範禅師再参している。

夢窓がこれまで参じた師は全て蘭溪の弟子である。このあと夢窓は来朝した一山一寧（いっさんいちねい）に参することになる。一山には執拗といえるほど熱心に参するが、印可を得ることが出来ず、独坐の旅を続けて、陸奥の松島の松島寺（今の瑞巖寺）に参禅した。そして近くの天台の寺院で講説を聴聞しているうちに大悟した。その後、夢窓疎石は来朝僧の無覚祖元の印可を受けた高峯顕日（後嵯峨天皇の皇子）の印可を得ることが出来た。

印可を得るまで、彼は建仁寺や建長寺などの僧堂に入って参禅修行を続けたのだが、それ以上に、僧堂を出でて旅を続け、自然の山野に独坐して修行を続けた。そして悟りを得た。悟後も甲斐や美濃の山中に深く入って、悟後の修行とされる聖胎長養を続けた。夢窓国師にとっては、山野自然こそが修行の場であったといえよう。堂塔伽藍の中かで弟子たちを育成するようになって、自分が悟りを得てきた坐禅修行の方法は、釈迦が指示した楞伽窟そのものであった。それが夢想国師の庭である。

夢想の悟るまでの時間は相当長かった。彼は山野を跋涉し景勝の地を好み隠遁した。思うに、宋直輸入の禅ではなく、日本流の禅を独自に編み出した、ということではないだろうか。宋朝の禅をそのまま受け入れただけでは、現在の日本庭園は生まれなかったと思う。

夢窓国師の略歴

夢窓国師は蘭溪道隆より一世代後の1274年に生まれた。彼は中国に渡って悟りを得たわけでもなく、中国から来た高僧から印可を受けたわけではない。彼は蘭溪道隆を慕って建仁寺や建長寺などの僧堂で参禅修行もしたが、しかし彼はそれ以上に僧堂を出て、旅を続け自然の山野に独坐して修行を続け悟りを開いた。夢想国師の悟りが大自然の中で行われたことは、彼の庭園が自然をテーマとしながら精神性を秘めていることと深く関係している、と思われる。

龍門瀑の原点と庭園の形

中国に龍門瀑をテーマとした庭園は現時点では確認されていない。しかし日本の庭園だけが龍門瀑をテーマとして採用されているのは不思議である。本格的に禅宗が日本に入ってきたのは蘭溪道隆からであるので、最新の知的な宗教として鎌倉武士に敬意をもって受容されたのではなかろうか。前述したように蘭溪の省行文の譬えが鎌倉武士に受け入れられたのである。ではそのテーマが庭園として造形化されたのは何時のことであろうか。蘭溪道隆が甲斐に流されたときに東光寺で庭を作ったという説がある。

一方、夢窓疎石は直接に蘭溪道隆の薫陶は受けていないが、蘭溪の弟子にのみ参禅しているのが、当然建長寺では省行文を読んでおり、龍門瀑をテーマとする庭を作ったと思われる。

以下にその説話が生まれた実在の滝と龍門瀑をテーマとした庭園を例示する。

4.1.2 禅宗思想の庭は禅語録・水墨画の視覚化による

禅宗の庭園は当初は修業のための道場であった。次第に造形化され方丈の周りに石組みがされるようになった。テーマは禅語録や水墨画の三次元化である。禅寺の庭は将軍や貴族の庭とは異なり、狭い面積の平地であった。そのため流水を使った池泉庭園は不可能である。よって必然的に枯山水庭園の発生につながった。

禅庭園の出典を以下に列記する

① 龍門瀑

「碧巖録の第七則 法眼、慧超に答う」
江國春風吹不起（江国の春風 吹き起たず）
鷓鴣啼在深花裏（しゃこないて深花裏にあり）
三級浪高魚化龍（三級波高くして魚龍と化す）
癡人猶辱夜塘水（癡人なお汲む夜塘の水）

② 楞伽窟

西芳寺・楞伽窟は修行道場として「大乘入楞伽經」の
「樹下及び巖穴 野屋と塚間 巢窟及び露地」による

③ 碧巖石・猿石・観音石

「五灯会元 夾山」より
猿は子を抱いて青嶂の後ろに帰り 鳥は花をふくんで碧巖の前に落つ

④ 夢窓疎石-1

仁人自是愛山静	仁人はから是山の静なるを愛す
智者天然楽水清	智者は天然に水の清きを楽しむ
莫怪愚憊翫山水	怪むこと莫れ愚憊の山水を翫ぶを
只因藉此砺精明	只だ此れを藉て精明を砺がんことを因るのみ

[現代語訳]

仁徳を体得した人は、もとより山の静かなところを愛し、
優れた智者は、自然の水の清らかな場を楽しむ。
私が山水を愛し、庭造りに没頭するのは、怪しまれるようなことではなく、
この庭造りを通して我が心を磨こうとしているのである。

⑤ 水墨画を庭園に再現（牧谿「観音猿鶴図軸」）



4.2 禅宗の庭

4.2.1 坐禅石または坐禅窟の系譜

禅宗において、修行道場の要として坐禅石や坐禅窟がある。当初は庭園としての造形ではなく、あくまでも修行の道場としての場であった。精神を統一するには坐禅の他に滝に打たれる方法もあるが、禅宗庭園の祖とも云える夢窓疎石は屋外に出て、見晴らしの良い場所で精神を研ぎ澄ました。しかし後世になると、一種のアクセサリとしての造形として庭園に作られるようになった。



白場(夢窓 31 歳) 夢窓疎石大悟の坐禅窟 (31 才)



不動堂(夢窓 32 歳) 修行道場の近くから見た富士山



永保寺(夢窓 40 歳) : 五老峰中腹にある坐禅石からは梵音岩から落ちる飛瀑泉が見える。また国宝観音堂へは「無際橋」という反り橋を渡って聖域に入る。この観音堂の中の観音は土岐川の流木によって作られた仏龕がある。この仏龕に向かって右側は飛瀑泉を象徴した造形が形作られている。

なお、夢窓はこの地方に都合 4 年いたが、東香寺などにも滞在していた。この寺の背後にある山の頂上には、約 20 畳の水平な岩盤があり、いわば巨大な坐禅石である。ここからは御岳山や白山が遙拝できる絶好の道場である。



吸江庵(夢想 44 歳) : 高知市五台山の麓



退耕庵(夢窓 49 歳) : 「金毛窟」 (千葉県夷隅町)



瑞泉寺(夢窓 53 歳) : 葆光窟(ほこうくつ)なる座禅窟があり、ここから富士山が眺められる。



瑞泉寺葆光窟(ほこうくつ)の明り取り



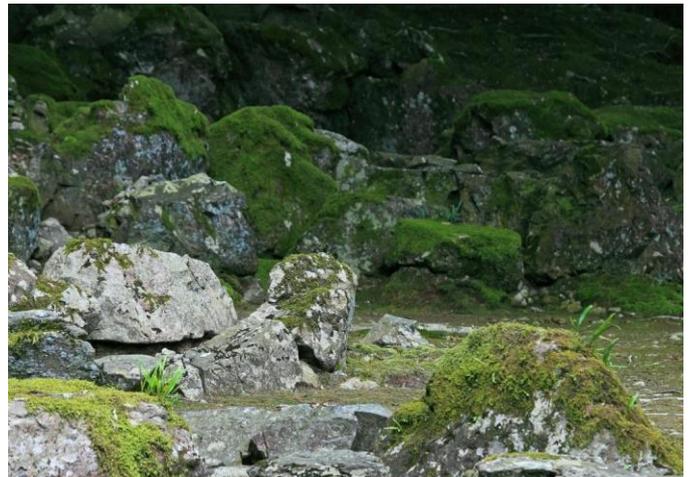
瑞泉寺: 徧界一覽亭より黎明の富士山を望む



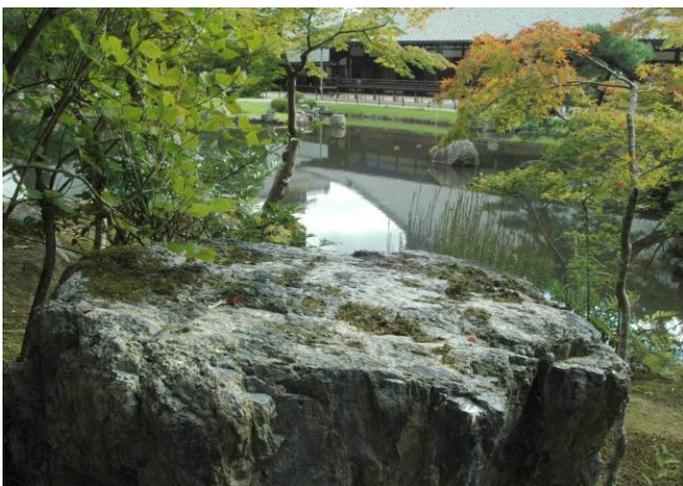
西芳寺(夢窓 65 歳) : 龍淵水と坐禪石



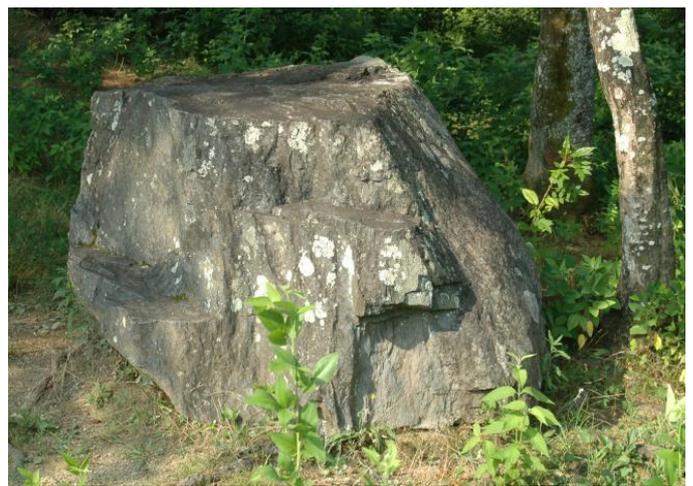
同上: 坐禪石を背後から撮影



同上: 坐禪石近くの龍門瀑(上記龍淵水と一対)



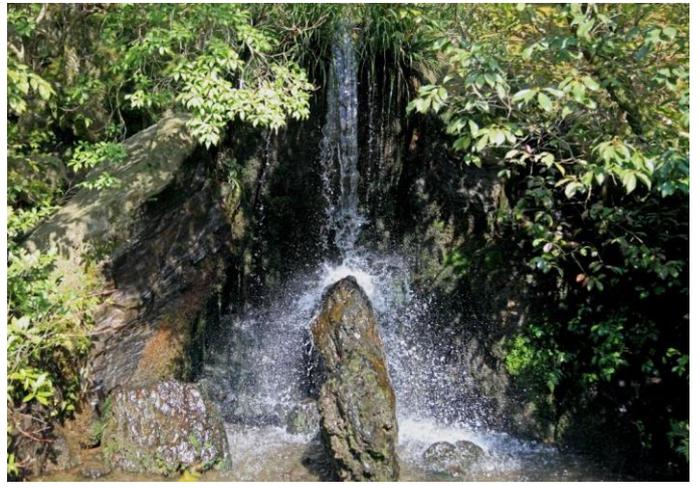
天龍寺(65 歳) : 曹源池の辺にある坐禪石



天龍寺 : 亀頂搭跡(亀山の頂上)にも坐禪石がある



金閣寺(夢窓歿後 46 年):坐禅石と銀河泉



同左:坐禅石近くにある龍門瀑



銀閣寺(歿後 138 年):相君泉(龍淵水に類似した泉と坐禅石の名残)



同左:相君泉横の岩盤石組は西芳寺の龍門瀑を倣った
(左記相君泉と一対)



酬恩庵(夢窓歿後、約 250 年後): 一休禅師を偲んで大徳寺・大仙院に倣った庭には古式に則り坐禅石がある

4.2.2 龍門瀑

4.2.2.1 龍門瀑の系譜-1

① 説話の原点になる実在の滝

龍門瀑の物語になる実在の滝は中国の黄河の上流にある壺口瀑布である。一方、日本においては蘭溪道隆が上京する際に大分で立ち寄った滝を「龍門の滝」と命名したのでここに紹介する。



壺口瀑布（西安から約400キロ陝西省の宜川県）

河幅約400mの黄河の流れは、滝の高さは30m位だが凄まじい水量で一瞬に落下した黄土の濁流は、物凄い飛沫と轟音をとどろかせている。



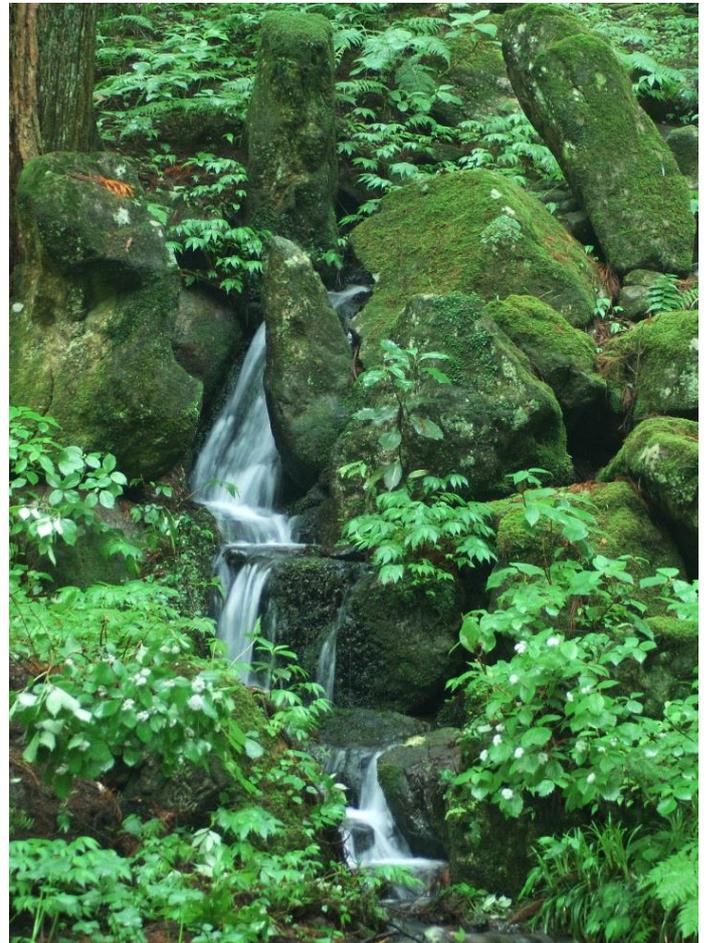
龍門の滝（大分県玖珠郡九重町松木）

蘭溪道隆は博多に着いてから上京する折に、途中大分県の九重町で滝に出会い「龍門の滝」と命名した。滝の正面に龍門寺を創始して、弟子の南岳を残し京都に発った(1247年)

② 庭園における龍門瀑の例（禅宗庭園における最も好まれたテーマであるので、詳細に例示する）



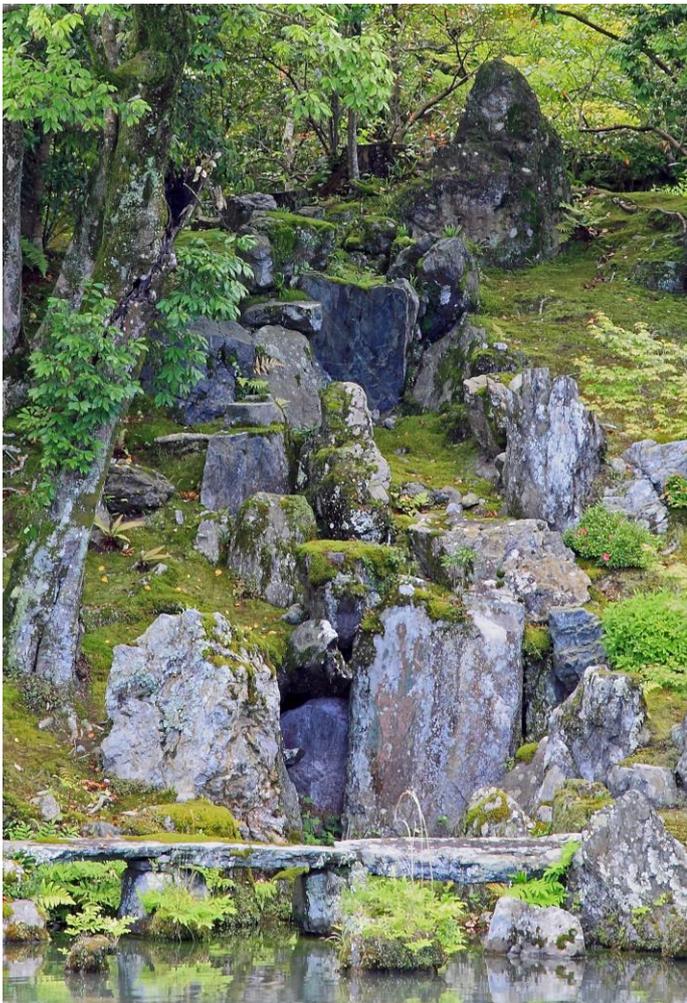
東光寺 蘭溪が作った初めての龍門瀑と云われている。ただし、当寺はあの庭好きの柳沢吉保の菩提寺になったため、荘厳のために改修された可能性もある。



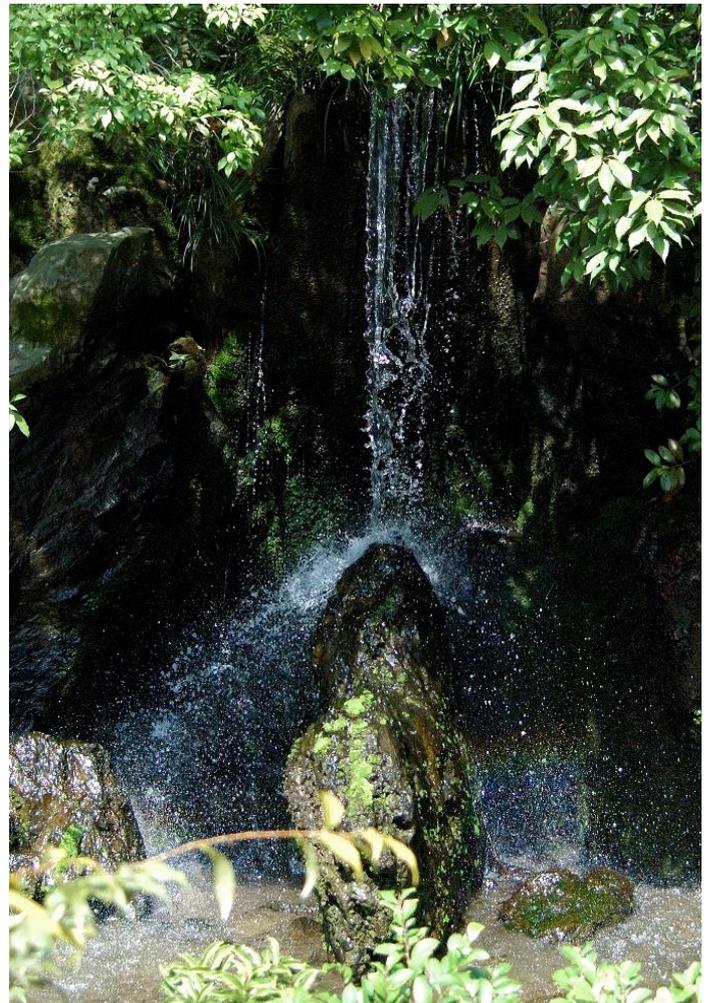
光前寺 蘭溪は東光寺近くの西岸寺にいたので蘭溪が作った龍門瀑か。一方、夢窓は甲州と永保寺（多治見）を往復しているときに、神坂峠ルートを通ったと思われるので、夢窓疎石の作庭の可能性もある。



西方寺（苔寺）：三段の滝を登る鯉魚（一段目の滝を登り二段目の滝に向かって遊泳する鯉魚）



天龍寺：一段目の滝を超え、観音の知恵（最上段の巨石が観音石）を授かり悟りの世界に入る後醍醐天皇を象徴。



金閣寺：三段の龍門瀑を一段の滝で象徴した三級岩式の滝



保国寺 立石のみの石組の中で、横石が三段の滝を表し、中段と下段の滝の間に斜めの鯉魚石がある



常栄寺（雪舟寺）この滝の約20m下の池中に鯉魚石があるが、写真に右下の石も鯉魚石の可能性もある。



普賢寺 手前にある鯉魚は轟音を轟かせて落ちている枯滝に向かって



萬福寺（伝雪舟寺） 画面中央の屹立した鯉魚は垂直に飛翔した瞬間である。



碧巖寺（熊野都県・菊池市）：碧巖録の漢詩を忠実に再現した龍門瀑



大仙院：水墨画の世界を写実的に再現した龍門瀑



酬恩庵: 重厚な龍門瀑と大きな坐禅石



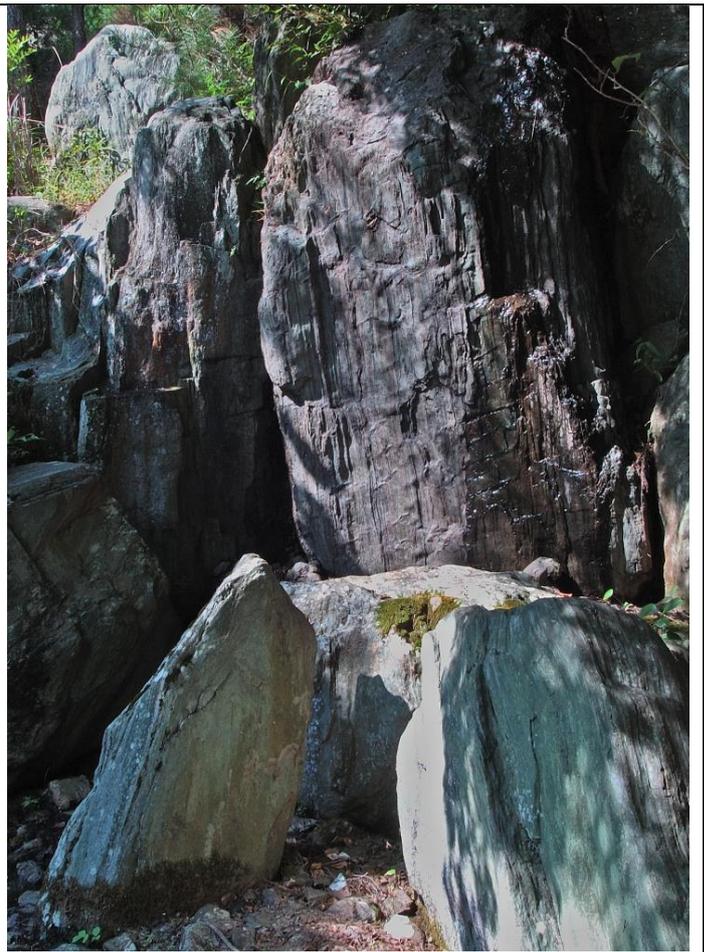
名古屋城



百瀬家 (松本市)



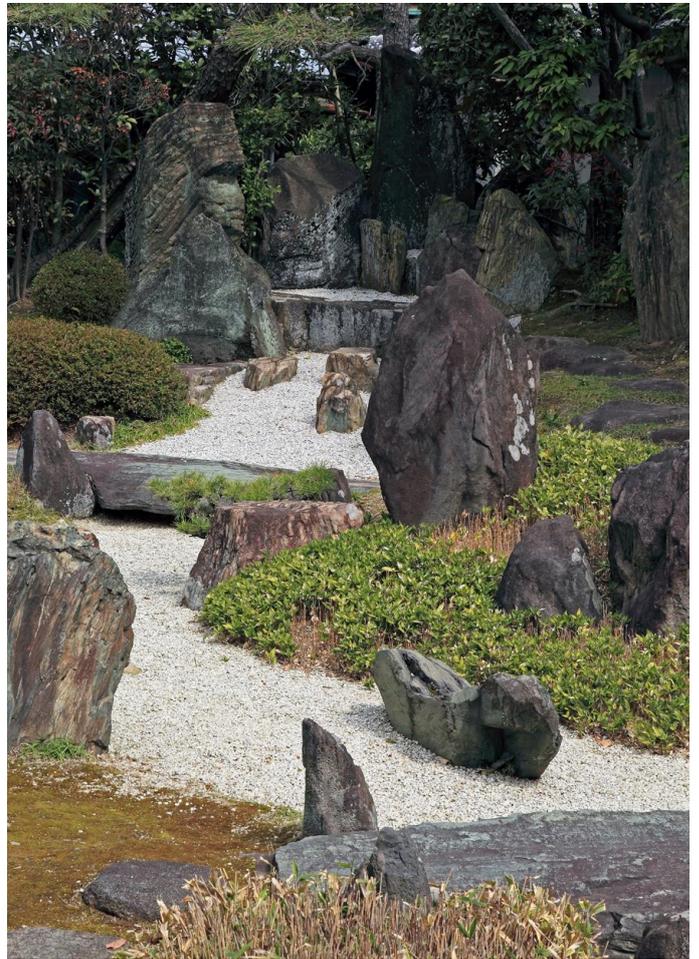
村上家 (兵庫県西脇市) 重森三玲



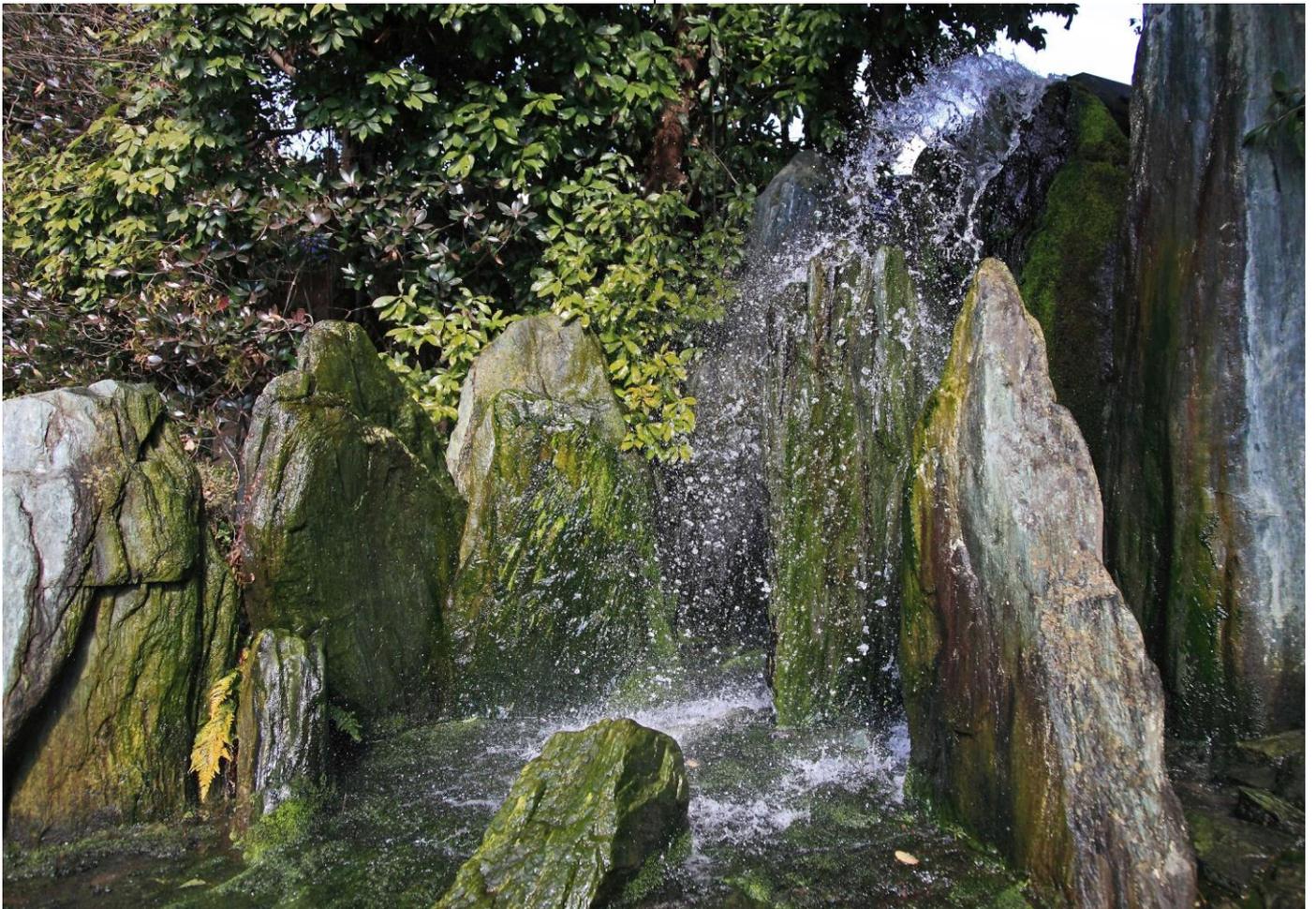
浅野家 (京都市) 重森三玲



泉涌寺・善能寺 重森三玲



西山家 重森三玲



松尾大社 重森三玲

4.2.2.2 龍門瀑の系譜-2 (鯉魚が龍に化身する瞬間の造形)

上記 4. 2. 2. 1 示したような単純な造形を避けて、鯉が龍に化身した瞬間の事例 3 庭示す。

① 常栄寺(雪舟寺-山口市)



龍門瀑全景



飛翔した瞬間の鯉魚と龍に化身した証である龍腹護岸 (上記写真の左側の石組部分)

② 碧巖寺 (熊本県・菊池市)



碧巖録の世界が忠実に眼前に蘇る

整然と並んだ護岸石は日本庭園の造形としては異質である。それは、鯉魚が龍に化した瞬間を写しているから。即ち龍腹護岸で、鯉魚が龍に化身したその瞬間を象徴している。

- ・護岸左からの名称: 龍尾石、龍の足、龍腹護岸、達磨石、碧巖石(左右に観音石と猿石)、龍門瀑
- ・池中左側からの名称: 鯉尾石(龍尾石の手前)、九山八海石(画面中央)、小鳥を象徴した小石、鯉魚石(立石)。



『碧巖録』に因んだ中央にある碧巖石と、その左右にある小さな石は観音石と猿石。池中の水平な石は坐禅石。このような造形のある庭園は金閣寺龍門瀑の左側にあるので、参考にして欲しい



碧巖石の左右には観音石(左)と猿石がある

「五灯会元 夾山」より
 猿抱子帰青嶂後 鳥啣花落碧巖前
 猿は子を抱いて青嶂の後ろに帰り
 鳥は花をふくんで碧巖の前に落つ

碧巖石(画面中央) 向って右側が猿石、碧巖石の
 前にある池中の傾斜した石は鳥が碧巖の前を滑空
 している物語を視覚化した造形。

③ 徳島城（千秋閣庭園）

石組み全体の石は概ねグレー色である。しかし中央左側の小石と右側の傾斜した石の二石は緑黒色で何かの象徴していることを予感させる。私は左側の小石は鯉魚石で、右側の傾斜した石は龍頭石ではないかと思った。しかし、漠然と想像しただけで確たる証拠が無かったが、高圧洗浄機で石に付着していた苔や周辺の雑草を博物館の方々と除去した。すると、周辺の石をよく見ると、中央の白い石に向かった筋目が鮮明に見えてきた。この白い石は何かを象徴しているに違いないと確信した。そうだ龍が握っている白い球である「如意宝珠」を象徴していることに思い至った。即ち石組みは龍門瀑であった。



枯滝・鯉魚石（中央左側の黒い石）・龍頭石（中央右側の傾斜した黒い石）・中央の「如意宝珠」（鯉魚が龍に化身したことを暗示している）。滝の石組石の筋目は総て「如意宝珠」に収斂している。



未剪定および未洗浄の状態

植栽が茂っていて滝の様子
が不鮮明であった。

白い石の周辺の石には水垢
や苔が付着していて、石の筋
目が不鮮明であった。

しかし今回樹木の剪定をして
石組を明瞭にし、かつ石の汚染
を除去したら、龍に化身した姿
が明瞭になった。

4.2.3 聖樹による祈りの聖域

禅寺における柏槇は単なる樹木ではなく青樹である。以下のその事例を示す。



① 建長寺：がっちり根を下ろした柏槇から発せられる靈気は、禅の行く末を見据えているかのようだ。樹齢750年とも云われている。（備考：『建長寺伽藍指図』によると、柏槇は参道の左右に22本植えられていた。現在は仏殿前の7本が残っている）。



② 雪の大徳寺：仏殿前の柏槇は大徳寺法灯を守るかのように枝を広げている。



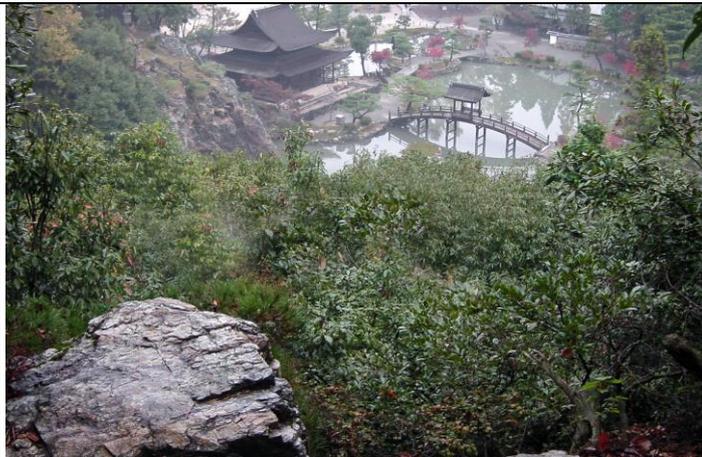
③ 金地院：この柏槇は造園時点で樹齢300年の盆栽のような木を植えたようなので、現在は推定700年になる。

4.2.4 水墨画の影響を受けた庭園

以下 11 庭で検証:永保寺・瑞泉寺・金閣寺一碧巖寺・常栄寺・大仙院・退蔵院・岐阜城・福田寺・阿波国分寺・粉河寺。今回水墨画と日本庭園の関係性を体系的に調べてみると、名庭のみであり、日本庭園の造形に与えた影響は大きい。水墨画の影響は龍門瀑など立体造形化したのは前述のとおりであるが、ここでは造園の構成意図も水墨画や仏像(宋より舶来した)からも影響を受けていることを明らかにしたい。

① 永保寺 1317:この庭は水月観音と仏龕を荘厳するための装置である(次頁の瑞泉寺同様)

水月観音の仏龕右側の滝の造形は右下の清雲寺木造であり、次頁の建長寺水墨画と同じ思想に由来



坐禅石から見る永保寺の全景



観音堂隣の梵音岩から落ちる飛瀑泉

この庭は夢窓疎石が最初に作ったのもので、1314年40歳である。西芳寺、天龍寺に先立つこと25年前である。この地は土岐川の流れがΩ字形に曲がったところの山の上であり、禅境の地としては最高である。特徴付けているのは無際橋といわれる反橋である。これは平安時代では俗界から極楽浄土の世界へ入るものであった。ここではその伝統を受け継いでいるが、この橋を渡れば、観音堂の観音の悟りの世界に至ることを意味している。次の特色は梵音岩といわれる巖である。この巨大な巖は古代以来の信仰の対象である磐座(いわくら)であったろう。しかし、ここから滝を落としているのは、自然の風景を習ったのではなく、隣の建物の中の観音から落としていることを意味する。更に重要なのは山の上にある坐禅石だ。ここからは視界が開け、気持ちが良い。坐禅石から見る滝の流れの景色は、下に示した仏像の肩から落ちる滝の景色である。



滝見観音(永保寺):流木の仏龕の中には観音が座している。仏龕には滝を施している。



南宋「観音菩薩坐像」重文・清雲寺

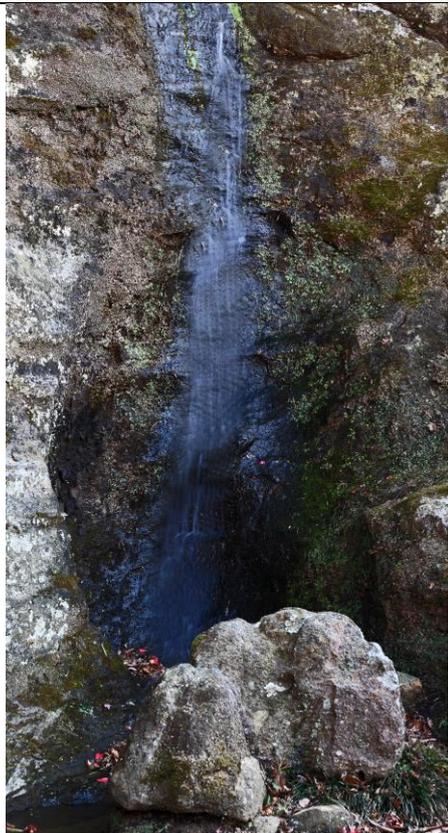
左記の観音像と同じく滝が施されており、この像が南宋で作られてことから、このような伝統が日本にもたらされたことが解る。

② 瑞泉寺

瑞泉寺天女洞前の池は岩盤を鑿で作ったのであるが、祠の中の観音像に月ををを見ていただくためだ。また向かって右側の滝は、寧波にある補陀落山の観音像を模していると思われる。禅庭園の原点。



修行の道場:水月観音を祭る道場である、岩盤を穿った池がある。更に写真右下には水分石と滝がある。これは単なる自然の風景の再現ではなく、中国伝来の観音信仰を再現するための立体絵画とも云える。前頁の永保寺の仏龕と金堂横の飛瀑泉の関係と同様の意図で作られていることが解る。



瑞泉寺洞窟の右横の滝



永保寺観音堂横の飛瀑泉



伝祥敬「白衣観音図」

重文・建長寺・全32幅

③ 金閣寺・碧巖寺

碧巖石脇の観音像と猿がいる庭園の例（「五灯会元 夾山」より 猿抱子帰青嶂後 鳥啣花落碧巖前）

猿は子を抱いて青嶂(せいしょう)の後(しりえ)に帰り、鳥は花を啣(ふく)んで碧巖の前に落(お)つ



金閣寺：左から観音石・猿石・碧巖石・鯉魚石



左図の拡大：観音石・親猿が子を抱いた姿



碧巖寺：猿抱子帰青嶂後 鳥啣花落碧巖前 を活写



碧巖石左右には観音石・猿石がある（斉藤忠一氏発掘）

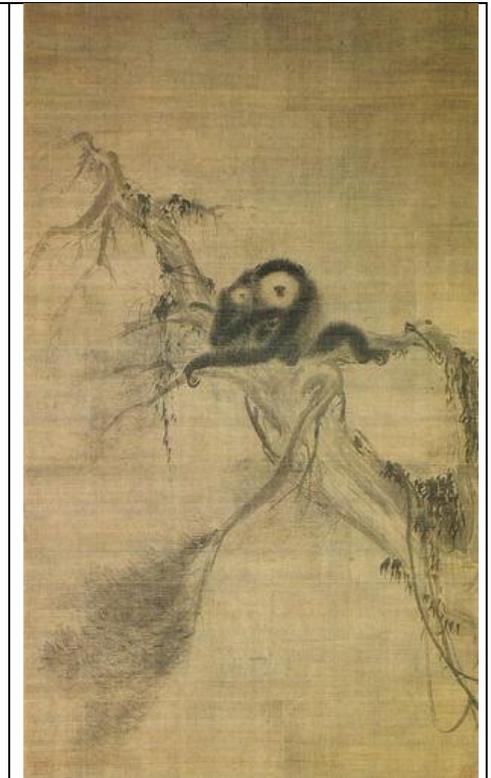
大徳寺の三幅対の水墨画(牧谿・大徳寺)：上記金閣寺、碧巖寺の造形の原点は以下の三副対の水墨画



牧谿(もっけい) 国宝 | 観音猿鶴図(鶴)



牧谿(もっけい) 国宝 | 観音猿鶴図(観音)



牧谿(もっけい) 国宝 | 観音猿鶴図(猿)

④ 常栄寺 1470 年

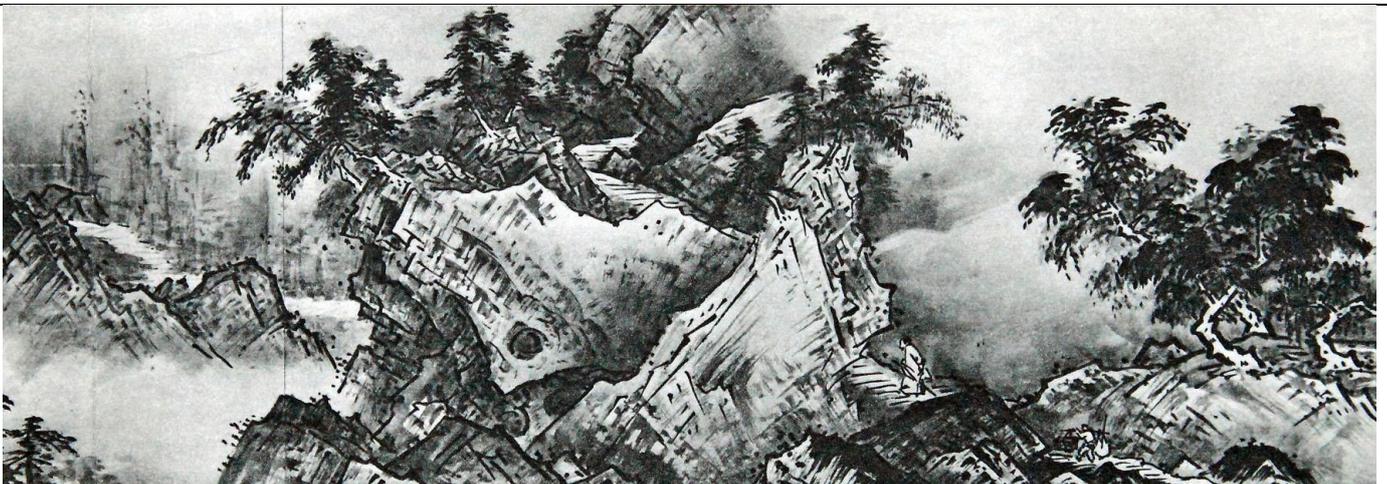
常栄寺庭園の注目点は 3 点ある。①遠近法効果を出すために、前列の石組を低くした地割。②山畔にある回遊路石組は水墨画の構図。③大半の水墨画に描かれるオーバーハングの巖を象徴した石(福田寺と同様の考え方)。



遠近法に依る石組は中国の水墨画の影響。手前に大きな石を配置し、奥に行くに従って小さな石を使う。これにより造形に奥行きが出る。この石組が傑作の理由は手前の二群の石組みが、背後の石組群よりも、約 1m および 0.5m 低く配石されていることだ。遠近法効果を最大限引き出すために、手前には最大限大きな石を配石するための絶妙な地割。



山畔にある回遊路石組：水墨画の高士が歩く山道を表している。雪舟作の水墨画と同じ構図。水墨画で実現できなかった三次元化を楽しんだと思う。



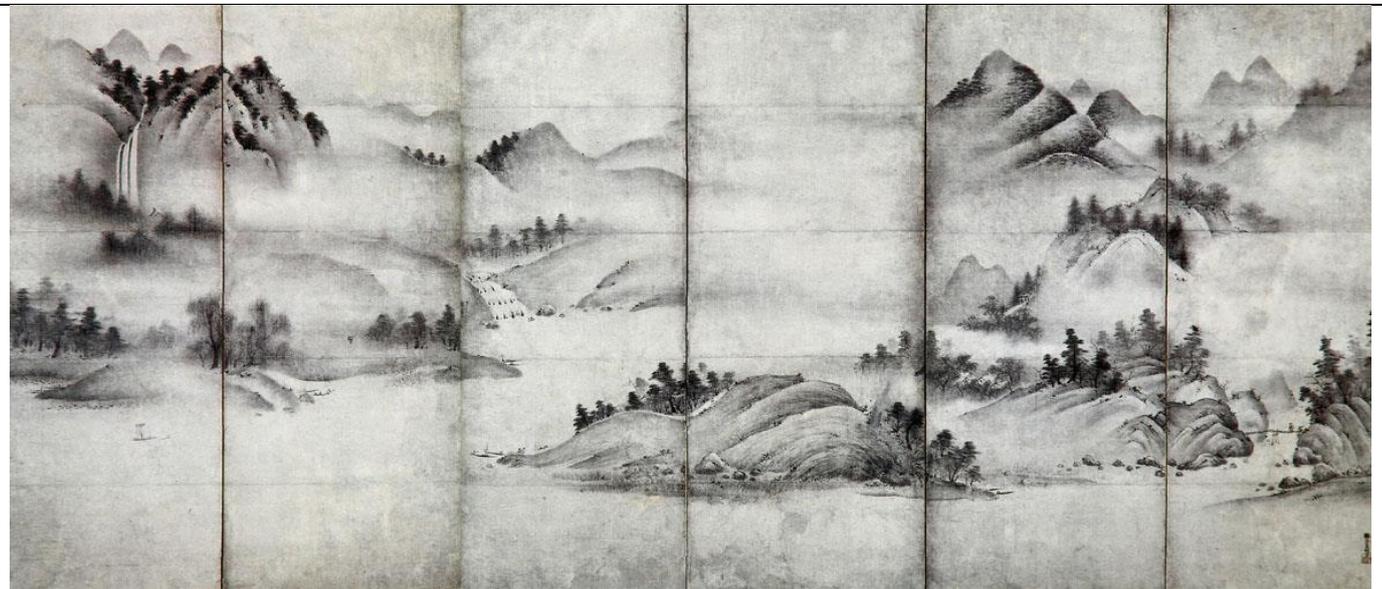
雪舟の「四季山水図巻」(春)では途切れ途切れの山道が、左奥で消えているが、これを反転すると左の庭園と同じ構図になる。

⑤ 大仙院 (1509～1560年)

1509年古岳宗亘（こがくそうこう）禅師が作ったといわれる。師は禅の悟りを分かり易く教えるために、狭い場所に禅の庭を作った。しかしその後、阿波の緑石などが寄贈され豪華に石が組まれている。庭園はやや具象的な内容を山水画の様な抽象的手法で表現した庭。当寺所蔵の襖絵から推測すると、その襖を少し開けると、背後には三次元化された水墨画が見え、趣の深い方丈である。



大仙院：やや抽象的造形であるが、水落石がかなり写実的であり、石橋が架かっていることも具象性である。



右隻：(外ポリタ) 二つの山から落ちた滝はやがて大河になり、そして左右に分かれて大海にこそそぐ構成は、大仙院庭園に似ている。この屏風の左右に大小ワンセットの山が二つもあり、大仙院の不動・観音石の原点か。

上記襖絵は【伝相阿弥・「蕭湘八景図」・1513年・重文・大仙院】との類似性から、伝相阿弥・「蕭湘八景図」の習作とも云われる。



狩野元信「禅宗始祖図」・大仙院。襖絵中央部の滝は滝の描写が写実的で、庭園の水落石の筋目との関係性有か

⑥ 退蔵院 (1558年)

退蔵院が狩野派の祖と云える狩野元信が作庭していることは周知の事であった。その証拠を示す。

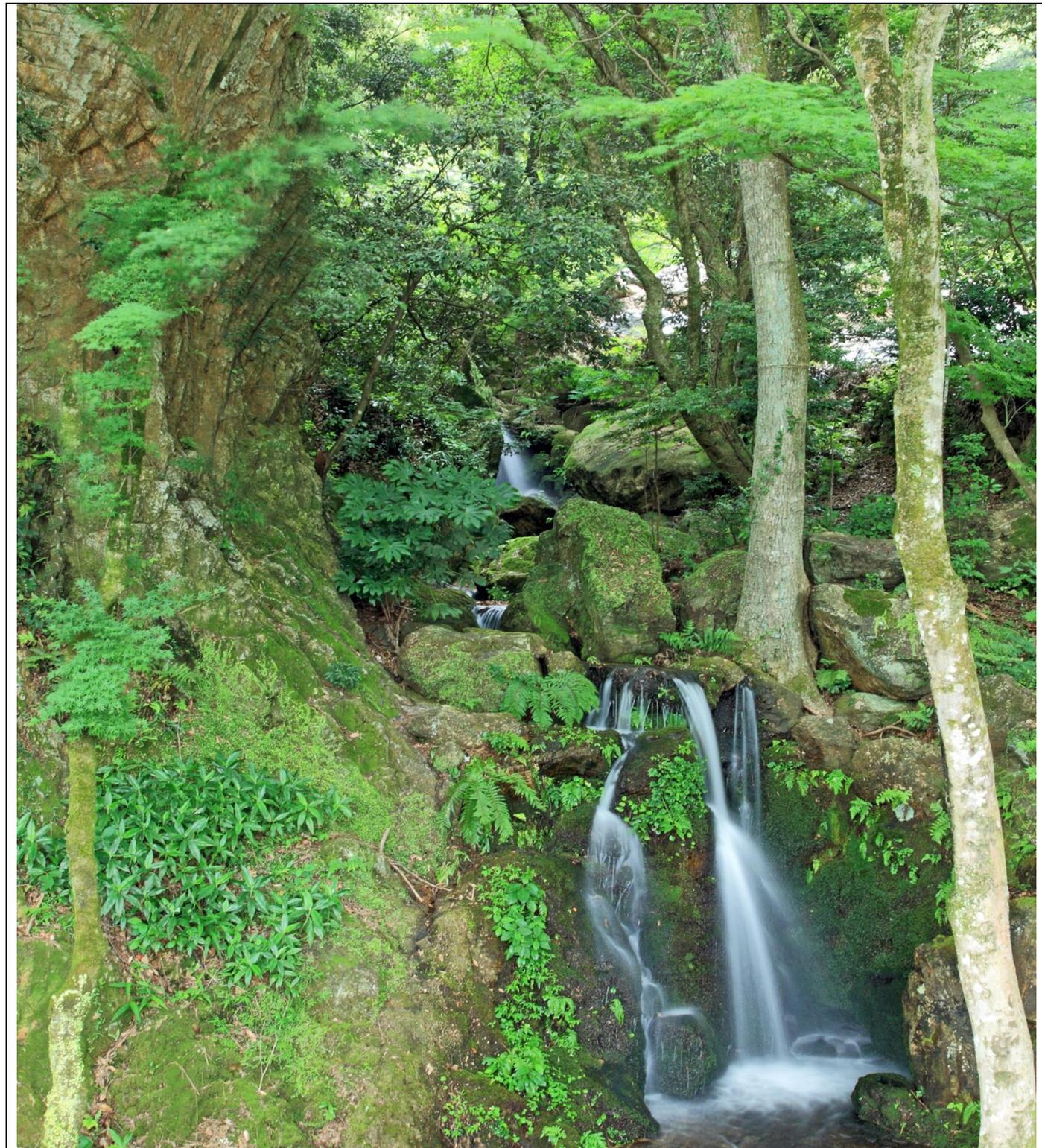


退蔵院庭園は下記「琴棋書画図」のように、画面右側に橋が架かり巖の背後に滝が落ちている。なお、上記写真の左側（視野外）は亀島であるが、この神仙島に橋が架かることはなかったが、下記水墨画では橋が架かっているため、その禁を破って橋が架かっている。



伝狩野元信筆の「琴棋書画図(部分)」(霊雲院)は滝前に石橋が架かり、背後に滝が落ちる

⑦ 岐阜城 1567 年 当庭のオーバーハングの石は水墨画の風景を実寸大に再現しているのが画期的。一方、④常栄寺・⑧福田寺のオーバーハングの石は象徴的な表現である。



滝の左側の岩盤は鑿で穿かれ、水墨画のオーバーハングの造形を実寸大で人工的に作られている。以下に雪舟などの水墨画の例を示す。雪舟(左4枚)、芸阿弥筆の5枚。



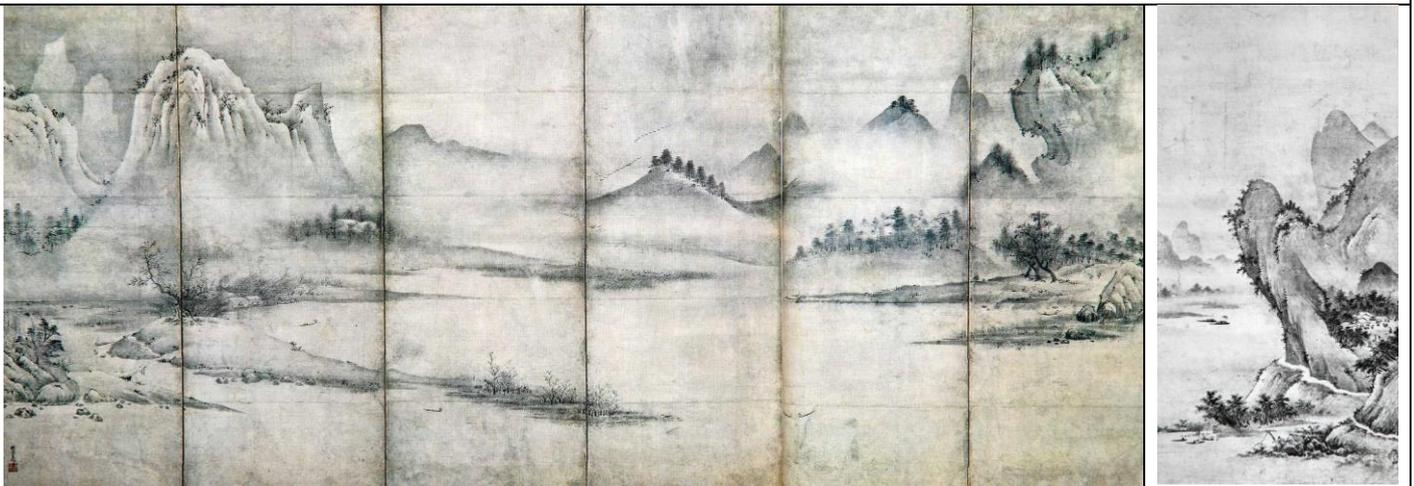
⑧ 福田寺 1643 年

当庭の特徴は 3 点ある。①意図的に傾斜させて石の目的は水墨画写しである。②浄土真宗の教えである「易行水道楽」の説話を説教する庭であろう。③逆遠近法の地割をし枯滝が見るものに迫ってくる。



右側出島の先端にある強く傾斜したライオンのような石組みがあるが、水墨画のオーバーハングの山塊を象徴。また、奥に行くほど高くなる地割は逆遠近法で、見るものに枯滝が迫ってくる。地割の空間構成美を支えているのは、適度に欠損部のある稜角の強い石の選択だ。

以下に庭園に影響を与えたと思われる水墨画



左隻 鑑岳真相 (相阿弥)・「四季山水図」

メトロポリタン美術館蔵：右端のライオンのような図像もリアルだ。

狩野元信・「蕭湘八景」・重文・東海庵



雪舟「山水図」牧松・了菴賛 国宝



雪舟「四季山水図」(夏)



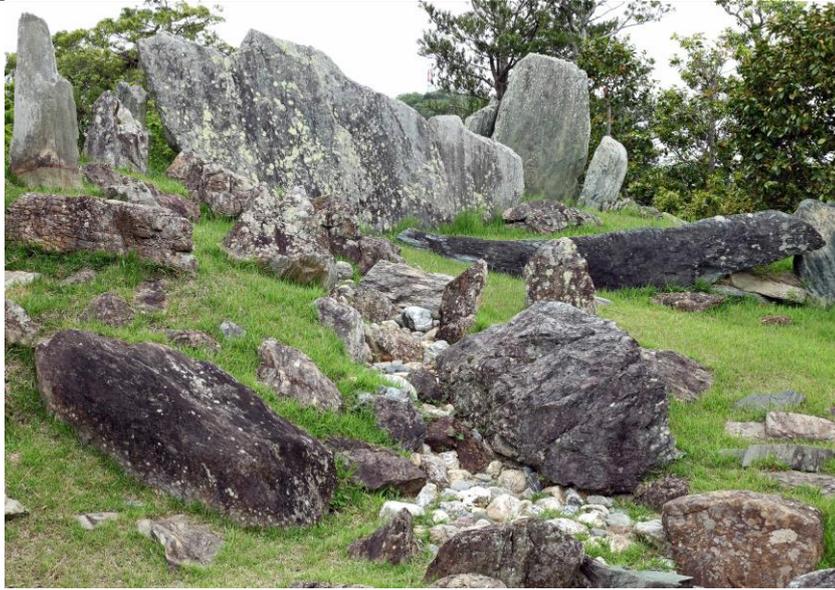
雪舟「四季山水図」春 東博



岳翁・山水図・重文・東博

⑨ 阿波国分寺 1800年

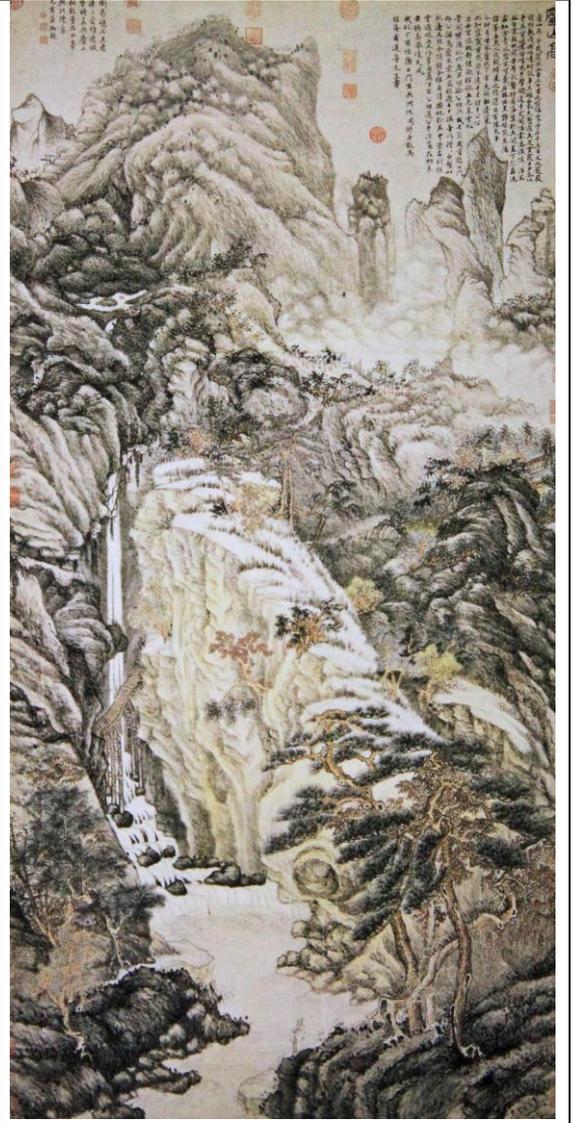
当庭のダイナミックな庭は名石の阿波の青石を使っていることにもよるが、空想で作った庭ではなく廬山を直接見た、その驚きが反映していると思う。



廬山の五老峰を象徴的に造形



五老峰の写真



水墨画に描かれた五老峰と三千尺の滝
(李白) 廬山図、沈周画 (1427-1509)



巨石による洞窟状の造形は廬山に実在する洞窟状の形を人工的に再現した。



天橋の仙人洞近くの道

⑩ 粉河寺

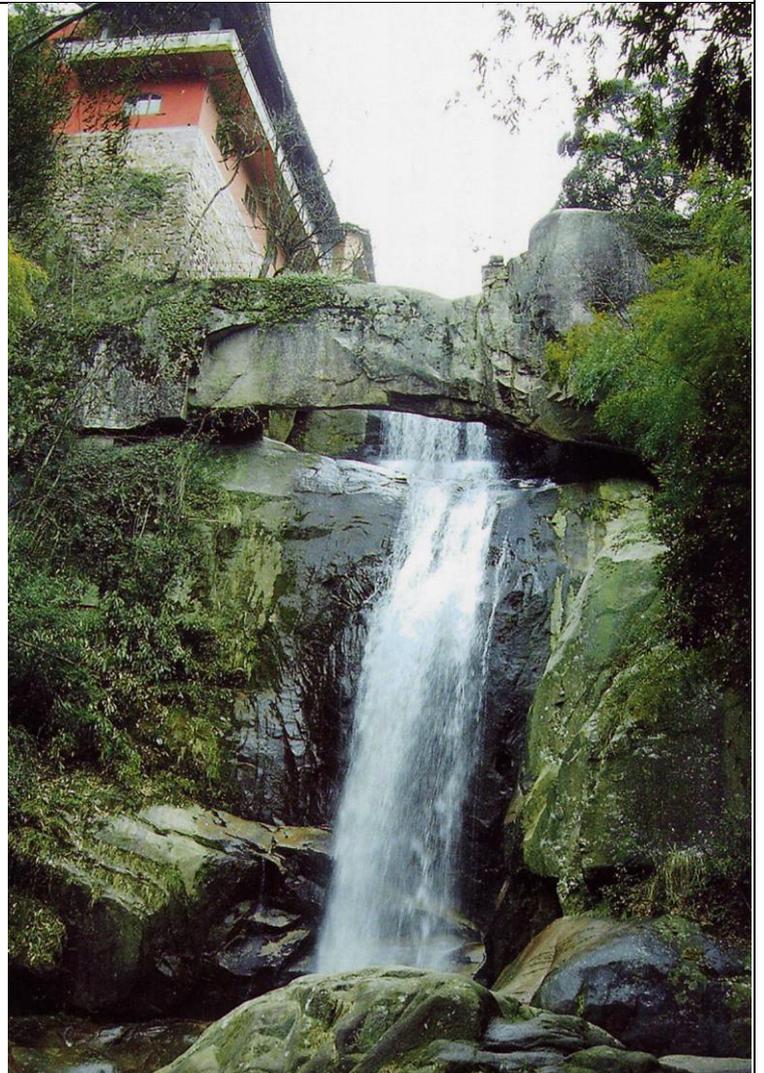
江戸時代末期にこのようなドラマチックな庭園が出来たことに驚きを禁じ得ない。ビューポイントは三点。①垂直の庭園。②林立する巨石群。③渓谷に架かった橋は中国にある実在の「石梁飛瀑」。



力強い石組みの庭。江戸時代末期においてこのような力強い石組をするエネルギーが育まれていた。テーマは鶴島・亀島・蓬莱山、そして石橋は中国の天台山・方広寺にある「石梁飛瀑」を象徴している。



南宋・金・周李常「五百羅漢図軸・天台石橋図」・南宋
1178年ワシントン・フーリア美術館



石梁瀑布は天台宗発祥の地の国清寺近くの方広寺にある。
(写真提供:田中昭三氏)

5 浄土真宗

中国の善導を始めとする、浄土教の代表的僧侶の年譜をしめす。

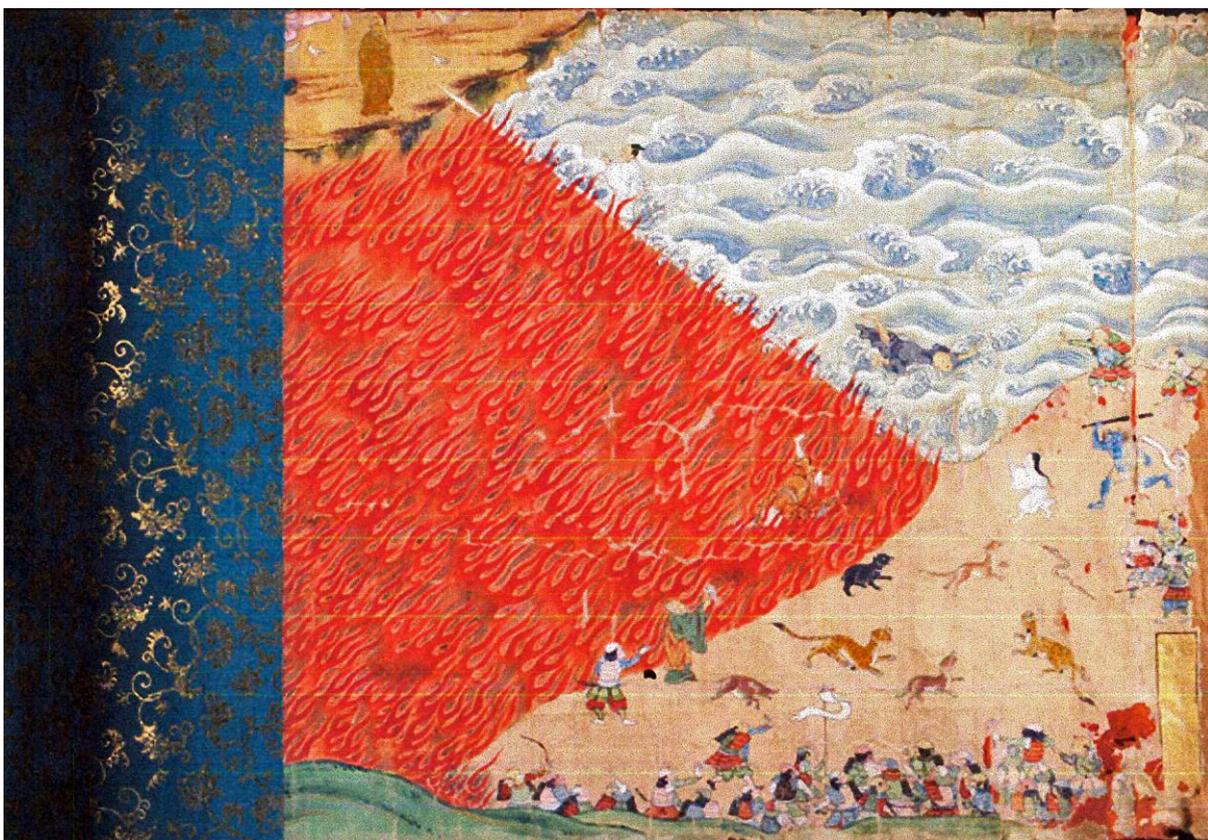
600	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600
←→		善導 (613-681) 『観無量寿経疏』								
			←→		源信=恵心 (942-1017) 『往生要集』					
					←→		法然 (1133-1212)			
						←→		親鸞 (1173-1262) 『教行信証』		
								←→		蓮如 (1415-1499)

5.1 浄土真宗の教理

広義に解釈すれば法然を教祖とする「2 浄土教」と類似の教理である。しかし日本庭園との関係で考察すると浄土教は主に平安貴族が末法の世から逃避するための宗教であった。一方、「浄土真宗」は親鸞を開祖とし、蓮如を中興の祖とした民衆の宗教である。そのため庭園は民衆を救済するための教理を説法する道場の庭である。浄土真宗の庭園のテーマは以下の「二河白道」・「易行水道楽」・「分陀利華」について記載する。

5.1.1 「二河白道」について各宗祖の著書

- ①善導大師 (613-681) : 唐の時代の中国浄土教 (中国浄土宗) の僧、の『観無量寿佛経疏』 (『仏説観無量寿経』の注釈書) 第四「散善義」にある二河白道の比喻 (二河喩) を絵画化したもの。
- ②法然 (1133-1212) : 『選択本願念仏集』第八章「念仏行者必可具足三心之文」 (他に遺文集である「和語灯録」でも触れられる) で、
- ③親鸞 (1173-1262) : 『教行信証』信巻、『愚禿鈔』(ぐとく)、「三帖和讃」所収「善導大師和讃」、『親鸞聖人御消息』所収「慈信宛消息」でも触れられる) で紹介している。
- ④一遍 (1239-1289) : 『一遍聖絵』によれば、文永八年 (1271 年) の春、信州善光寺に訪れた一遍は、参籠に参籠を重ねた末に、自らさとりを得て、「二河白道」の図を本尊として描いたという。この「二河白道図」を携えて一遍は故郷に帰り、浮穴郡の窪寺というところに閑室を構え、その東壁にこの図を本尊としてかけて、念仏三昧の生活に入ったということである (踊り念仏は 1279 年から)。



出典：龍谷大学大見や図書館 2013 年度特別展観『絵のある本』 3 二河白道図 (旧飛騨・赤田家蔵)

5.1.2 善導の「二河白道」

5.1.1.1 善導による有名な「二河白道」の譬えの概要【日本大百科全書(ニッポニカ)の解説】

浄土往生(おうじょう)を願う者が迷いの世界から極楽(ごくらく)に至る道筋を、水・火の二河をもとに説き明かした譬え。唐の善導(ぜんどう) (613—681) が『観経疏(かんぎょうしよ)』散善義(さんぜんぎ)で記述したのによる。人が西に向かって行くと、南に火の河、北に水の河があり、その中間に4、5寸(約12～15センチメートル)の白道があって、水火が猛然と押し寄せ、後方からは群賊や悪獣が迫ってくる。進退窮まり、白道を渡ろうかと思案していると、東岸から早く渡れ、死の災いはないという声、西岸からかならず守るからという声に励まされ、信じて西岸に達した。火の河は人間の驕(いかり)りや憎しみ、水の河は愛着や欲望、白道は浄土往生を願う清浄(しょうじょう)心、群賊たちは人間の迷いから生ずる悪い考えなど、東岸の声は娑婆(しゃば)世界の釈尊(しゃくそん)の教え、西岸の声は極楽浄土の阿弥陀(あみだ)仏の呼び声に譬えたもの。日本では絵解きとして広く知られた。

5.1.1.2 善導における本文の現代語訳

『観無量寿経疏』第四卷「散善義」〔二河白道の譬え〕[藤田(1985)：和訳]

また、すべての往生を願う人たちに申しあげる。いまあらためて、修行者のために一つの譬えを説いて、信心を守り、それによって外からのよこしまな異なった所説による非難を防ぐことにしよう。それは何かといえば、こういうことである。

たとえば、ある人が西に向かって百千里の道を行こうとしているとき、忽然として途中に二つの河のあるのが見えた。一つは火の河で南にあり、もう一つは水の河で北にある。二つの河は、それぞれ幅が百歩で、どちらも深く底なしであり、南も北も果てしなく続いている。ちょうど、水と火の二河の中間に一すじの白い道があって、幅が四、五寸ばかりのようである。この道は東の岸から西の岸まで続き、その長さはまた百歩である。水の河の波浪はこもごも打ち寄せて道をぬらし、火の河の火焰もまたおし寄せて道を焼き、水と火とが互いに交わって、常に止むことがない。この人がすでに広々とした、果てしなぬ処に來たときは、だれ一人もおらず、多くの盜賊の群れや猛獸がいて、この人がただ一人なのを見て、われがちにせまってきて殺そうとする。この人は死を恐れて、すぐに西に向かって走ったところ、忽然としてこの大河があるのを見て、自分でこう思った。「この河は南と北に遠く続き、その際限も見えない。中間に一すじの白い道が見えるが、その幅は非常に狭い。二つの岸のへだたりは〔百歩しかないので〕近いけれども、どうやって渡ることができよう。今日こそ、きっと死ぬにちがいない。もしあともどりしようとするれば、盜賊の群れや猛獸がだんだん近づきせまってくるし、南か北に避けて走ろうとするれば、猛獸や毒虫がわれがちに自分に向かってくる。また、西に向かって道をたどって行こうとするれば、おそらく水の河か火の河に落ちてしまうだろう」と。こういうときの恐ろしさは、何と云ってもいかに分からないほどであるので、すぐさまこの人はまたこう思った。「わたしはいま、あともどりしても死ぬだろう。とどまっても死ぬだろう。進んでも死ぬだろう。どれ一つとして死を免れることができないとすれば、わたしはむしろこの道をたどって前に向かって行こう。すでにこの道があるのだから、きっと渡れるであろう」と。

このように思ったとき、東の岸からすぐに人の勧める声が聞こえてきた。「そなたは、ただ心を決めて、この道をたどって行きなさい。決して死ぬようなことはないであろう。もしそこにとどまっていたら、すぐにも死ぬだろう」と。また、西の岸に人がいて呼んで言う。「そなたは、一心に正しく念じて、まっすぐに來なさい。わたくしがよくそなたを守ってあげよう。決して水や火の危難におちることを恐れてはいけません」と。この人は、すでにこちらから行くようにとすすめられ、あちらから來るようにとの呼ぶ声を聞いて、即座にこれを自分の身と心にうけとめ、心を決めて道をたどってまっすぐに進み、疑いひるみ退く心をおこすことがなかった。ところが、一歩、二歩と進んで行くと、東の岸の盜賊たちは呼んで言った。「おまえはもどるがよい。その道はあぶなくて渡ることができない。きっと死ぬにちがいない。われらはだれ一人、悪い心をいだいておまえにおそいかかるようなことはしないのだ」と。しかし、この人は、その呼び声を聞いても、ふりかえりもせず、一心に道を思いつめてまっすぐに進んで行くと、たちどころに西の岸に到着して、とこしえにさまざまな苦難を離れ、善い友にめぐりあって喜び楽しむことが尽きなかった、という。以上が譬えである。

5.1.3 「易行水道楽」の伝承経過

5.1.3.1 龍樹(りゅうじゆ)→鳩摩羅什→曇鸞(どんらん)→道綽(どうしゃく)→善導(ぜんどう)→親鸞の著書

①龍樹(150頃~250頃)：『十住毘婆娑論』(じゅうじゅうひばしゃろん)・「易行品」

②鳩摩羅什(344~413)：『十住毘婆娑論』の中国語への翻訳

④曇鸞(476~542)：「易行道」を「他力」と解釈し、親鸞の『正信偈』に影響を与えた。

菩提流支(ぼだいるし)に出会い、『観無量寿経(かんむりょうじゆきょう)』一卷を授けられた、道教はもちろんのこと自力修行の仏道をすべて捨てて、浄土の教えを明らかにした。

曇鸞により自力(じりき)と他力(たりき)の教えが明確になった。

⑤道綽(562~645)：『安楽集』で観無量寿経を解説し、仏教を聖道(しょうどう)門と浄土門に分けて説いた最初の本。

609年48歳のとき玄中寺の曇鸞の碑文を見て感じ、自力修行の道を捨て、浄土教に帰依した。

「浄土門」仏教を分類手法の一つで、聖道門(しょうどうもん)(禅宗・真言・天台)に対比される。浄土門は阿彌陀仏の本願を信じ、それにすがって極楽浄土に生まれ、悟りをえようとするもので、他力門・易行(いぎょう)道とされる。

⑥善導(613~681)：29歳のとき、道綽(どうしゃく)を玄忠寺(げんちゅうじ)に訪ねて浄土の教えを学び、その中でも特に『観経(かんぎょう)』を学んだ。特に『仏説観無量寿経』の注釈書)第四「散善義」にある二河白道の比喩(二河喩)は有名。

⑦親鸞(1173-1262) 「易行水道楽」

親鸞によって作られた正信偈における7言120句の中から55句、56句を抜粋し下に示す。

5.1.3.2 各宗祖が「易行水道楽」について記した概要を記す。

浄土真宗の庭園のテーマとして「龍樹による易行品」があるが、ここでは庭園テーマとして「他力」の象徴を「易行道」とすることになった経過を以下に示す。

5.1.3.2.1 龍樹の『十住毘婆娑論』・「易行品」【既に龍樹(150頃~250頃)が「易行道」と「自力」を規定している】。

【原文】

顕示難行陸路苦
信楽易行水道楽

【読み方】

難行陸路(ろくろ)、苦しきことを顕示(けんじ)して、
易行(いぎょう)の水道(しうどう)、楽しきことを信楽(しんぎょう)せしむ。

原文の比喩の意味

『十住毘婆娑論』の「易行(いぎょう)品」というところに、「難行道」と「易行道」のことが述べられている。つまり仏道を歩むのに、困難な道と、易しい道と、二つの道があると説かれている。「難行道」は、自分の歩く力をたよりにして、けわしい陸路を進もうとする「聖道門」の修行をたとえたもの。一方の「易行道」は、阿彌陀仏の本願という船に乗せてもらって、安楽に浄土往生に導かれるとする「浄土門」の念仏の教えである。「難易二道」

5.1.3.2.2 曇鸞は龍樹の『十住毘婆娑論(じゅうじゅうひばしゃろん)』に説かれる易行道を他力と規定した。

5.1.3.2.3 道綽は『十住毘婆沙論』の「難行道」と「易行道」の解釈を『安樂集』として著した。

以下に『安樂集』の一部の現代語訳を記す。

【24】第一に、難行道と易行道とを述べるならば、この中を二つとする。一つには難行道と易行道とを出し、二つには問答してこれを解釈する。

……………到底菩提の道に進むことはむずかしい。それゆえ、龍樹菩薩が仰せられる。

不退の位を求めるのに、二種の道がある。一つには難行道、二つには易行道である。難行道というのは、五濁の汚れた世、仏のましまさぬ時に、不退の位を求めることを難とする。この難は多いが略して五つを述べる。一つには、仏教にまぎらわしい外道の善が菩薩の修行の法を乱す。二つには、自己のさとりのみを求めるところの声聞の法が菩薩の大慈悲を行うことをさまたげる。三つには、人のことをかえりみない悪人が他人の修行を破る。四つには、すべて人間・天上の果報は、迷いであるが善果であるために執着して、菩薩の行を破る。五つには、ただ自力だけであって他力の支持がない。かようなことは目に見るところ皆これである。たとえば、陸路を歩いて行くのはすなわち苦しいようなものである。ゆえに難行道という。易行道というのは、ただ仏を信じて浄土の往生を願い、菩提心をおこして功德を積み、いろいろな行業を修めるならば、仏の願力によってすなわち往生し、仏力の支えによって、浄土に生れ、そこで大乘正定聚の位に入る。正定聚とは不退の位である。たとえば、水路を船で行けば楽しいようなものである。ゆえに、易行道と名づける。

問うていう。さとの果は一つであるから、その因を修めることも、また二つないはずである。それにどうして、この土で行を修めて、仏果に向うのを名づけて難行道とし、浄土に往生して大菩提をさとうとするのを易行道と名づけるのか。

答えていう。いろいろの大乘経の中に説いてあるすべての行法には、みな自力・他力、自摂・他摂がある。『どういうのが自力であるか』というと、たとえば、人が迷いを恐れ、菩提心をおこして出家し、禪定を修めて神通力をおこし、あらゆる世界へ自由自在に行くようなのを、名づけて自力とする。「『どういうのが他力であるか』というと」、たとえば、劣夫は自分の力では驢馬に乗って空にのぼることができなくても、もし転輪王の行幸に従えば空にのぼってあらゆる世界に行くことができるようなものである。すなわち転輪王の威力によるから、これを他力と名づける。衆生もまたそのとおりである。この世で菩提心をおこして、修行するのを自力とする。浄土の往生を願って、臨終の時に阿弥陀如来の光台に迎えられ、往生をうるのを他力とする。『それゆえ《大経》に、

十方の人天で、わが国に往生しようと思うものは、みな阿弥陀如来の大願業力をもって最上の力とせぬものはない。

と説かれている。もしそうでなかったならば、四十八願は、いたずらに設けたことになる。後の世の仏法を学ぶ者に告げる。すでに、乗すべき他力の法があるから、みずから、自力にかかわって、いたずらに迷いの世界におってはならない。

5.1.3.2.4 親鸞による正信偈における「易行水道楽」の原本と意訳

親鸞によって作られた7言120句の中から55句、56句を抜粋し下に示す。

けんじなんぎょうろくろく
55 顕 示 難 行 陸 路 苦 難行の陸路をすすむのは苦しいとあらわされた龍樹菩薩は

しんぎょういぎょうしいどうらく
56 信 楽 易 行 水 道 楽 易行の船の旅(易行の水道=信心)の楽しきことをすすめられ

親鸞は「自力で悟りに達することは困難で、絶対的な他力を信ずれば、容易に阿弥陀のもとに行ける」との譬えである。

中田の解釈：親鸞のこの句は他力本願の要として庭園のテーマとして、多く採用されたと思う。

5.1.4. 「分陀利華」と經典

5.1.4.1 釈迦が『観無量寿経』の中で「分陀利華」について述べていることは

[結語]

仏(釈尊)は、弟子の阿難(あなん)からの、この経の「かなめ」は何なのですかとの問いに対して、念仏すべきことを強調される。すなわち、「念仏をする人は、人々の中の分陀利華(ふんだりけ)(ブンダリーカ、白蓮華、汚泥の中から咲く白蓮華の花のような希有な尊き人)である(若念仏者、当知此人、是人中分陀利華)」と説かれ、そして最後に「あなたはよくこの語をたもちなさい。この語をたもてとは、すなわち無量寿仏のみ名をたもちなさいということである(汝好持是語。持是語者、即是持無量寿仏名)」、つまり念仏せよ、と言って、説法を終えられる。

5.1.4.2 曇鸞

親鸞は曇鸞(どんらん)大師のお言葉をお引きになり、「淤泥華(おでいけ)といふは、『経』(維摩経)に説いてのたまはく、高原の陸地(ろくじ)には蓮(はちす)を生(しょう)ぜず。卑湿(ひしゅう)の淤泥(おでい)に蓮華を生(しょう)ず」(註釈版聖典 549 ページ)

5.1.4.3 善導：妙好人、上上人(じょうじょうにん)、希有人(けうにん)、最勝人(さいしょうにん)といわれている。

善導の『観無量寿経疏』散善義において、念仏者を

「明若能相續念仏者 此人甚為希有 更無物可以方之 故引分陀利為喩 言分陀利者 名人中好華 亦名希有華 亦名人中上上華 亦名人中妙好華 此華相伝名蔡華是 若念仏者 即是人中好人 人中妙好人 人中上上人 人中希有人 人中最勝人也」

(訓読 - もしよく相續して念仏するものは、この人はなはだ希有なりとなす、さらに物としてもつてこれに方ぶべきなし。ゆゑに分陀利を引きて喩へとなすことを明かす。「分陀利」といふは、人中の好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中の上上華と名づけ、また人中の妙好華と名づく。この華相伝して蔡華と名づくるこれなり。もし念仏するものは、すなはちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中最勝人なり。)

5.1.4.4 親鸞の正信偈における「分陀利華」とは

原文

一切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願
仏言廣大勝解者 是人名分陀利華

意識

如来の本願を聞いて信ずるならば、
仏たちは「すぐれた法の体得者」とほめたたえ、
「泥の中に咲く白蓮華(びやくれんげ)」と称賛してくださる。

「蔡華」:千葉の白蓮華のこと。蔡は白亀の意で、聖人が世に出現する時、白亀が千葉(せんよう)の白蓮華にのって現れるという言い伝えがある。(信巻 P.262、散善義 P.499)

また、善導の「散善義」499を引用して蔡華について以下のように記している。

【98】またいはく(散善義 四九九)、「く念仏者より下く生諸仏家に至るまでこのかたは、まさしく念仏三昧の功能超絶して、まことに雑善をして比類とすることを得るにあらざることを顕す。すなはちそれに五つあり。一つには、弥陀仏の名を専念することを明かす。二つには、能念の人を指讃することを明かす。三つには、もしよく相續して念仏するひと、この人はなはだ希有なりとなす、さらに物としてもつてこれの方ぶべきことなきことを明かす。ゆゑに分陀利を引きて喩へとなす。分陀利といふは、人中の好華と名づく、また希有華と名づく、また人中の上上華と名づく、また人中の妙好華と名づく。この華あひ伝へて蔡華と名づくるこれなり。もし念仏のひとはすなはちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中最勝人なり。

5.2.1 庭園におけるテーマとその意味の概要

①「二河白道」のテーマ

「二河白道」と言えば善導を想起するが、善導(613～681)は29歳のとき、道綽を玄忠寺(げんちゅうじ)に訪ねて浄土の教えを学び、中でも特に『観無量寿経』を学んだ。道綽は自力＝陸路を歩く難行道と、他力＝水路を船で行けば楽しい易行道とを、峻別していたので、善導の「二河白道」説は、船による易行道を指していたのと推測する。

結論:①「二河白道」と「易行水道楽」は古来より同義語的に考えられていたと、考える。

② 桂離宮のみが白色の石橋を「二河白道」に見立てている。

②「易行水道楽」のテーマ

「易行水道楽」については、既に龍樹(150頃～250頃)が記されていて、曇鸞、道綽を經由して善導に至り、最終的には親鸞に至った。

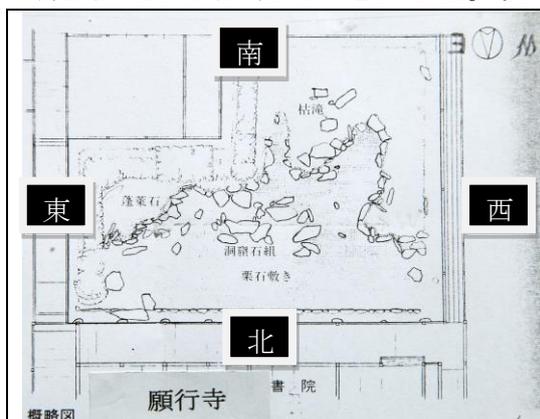
特に道綽により浄土門は阿弥陀仏の本願を信じ、それにすがって極楽浄土に生まれ、悟りをえようとするもので、他力門・易行(いぎよう)道とされる。

一方、聖道門(しょうどうもん)(禅宗・真言・天台)は自力で修行するのは、陸路を歩いて行くことなので、すなわち苦しいようなものである。ゆえに難行道という。

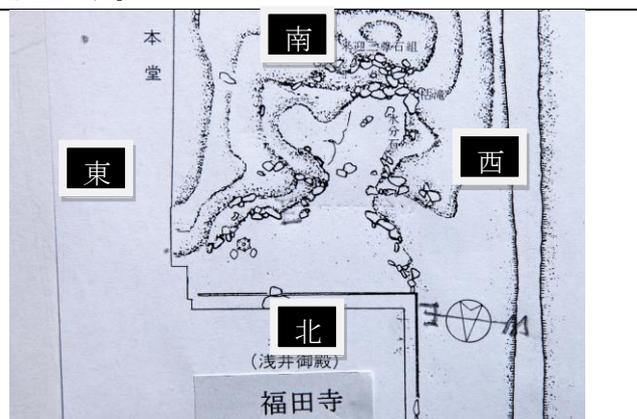
結論:他力によって救われる「易行水道楽」が庭園のテーマとなった。

背景① 鎌倉時代以降、宗教は貴族のものではなく武士や、民衆のものになった。自力の禅宗・天台宗・真言宗は貴族や武士階級が信仰した。一方、農民を中心とする大衆は、他力の浄土真宗を信仰した。

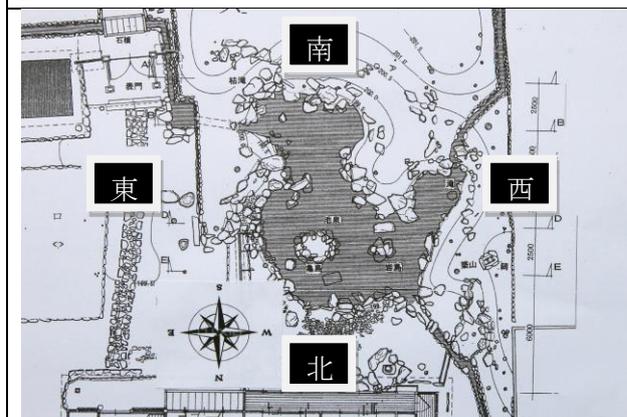
② 一般的な建物は南向きに建てるので、庭園は北側に作られる。よって、極楽に行く方向は、東側から西側に行くことになる。以下のその例を示す。



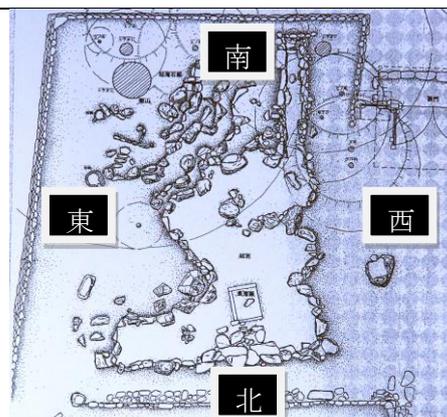
願行寺



福田寺



赤田家



西村家

4 庭園は例外なく南向きで、かつ出島が左右から出ている、舟または棧橋の石組み造形がある。

③「分陀利華」のテーマ

蔡華の象徴は白い亀であるが、願行寺・赤田家にある。

5.2.2 浄土真宗の庭

① 願行寺



以下に「舟で渡ること良いとの教え」を記す。

「顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽」

難行の陸路、苦しきこと顕示して 易行水道、楽しきことを信楽せしむ。出典：浄土真宗本願寺派の『正信念仏偈』



「蔡華」の蔡は亀の名、華は蓮華の略

白亀が白蓮華に乗って現れるの意＝分陀利華 出典：真宗辞典



「易行水道楽」を象徴した小舟を表している

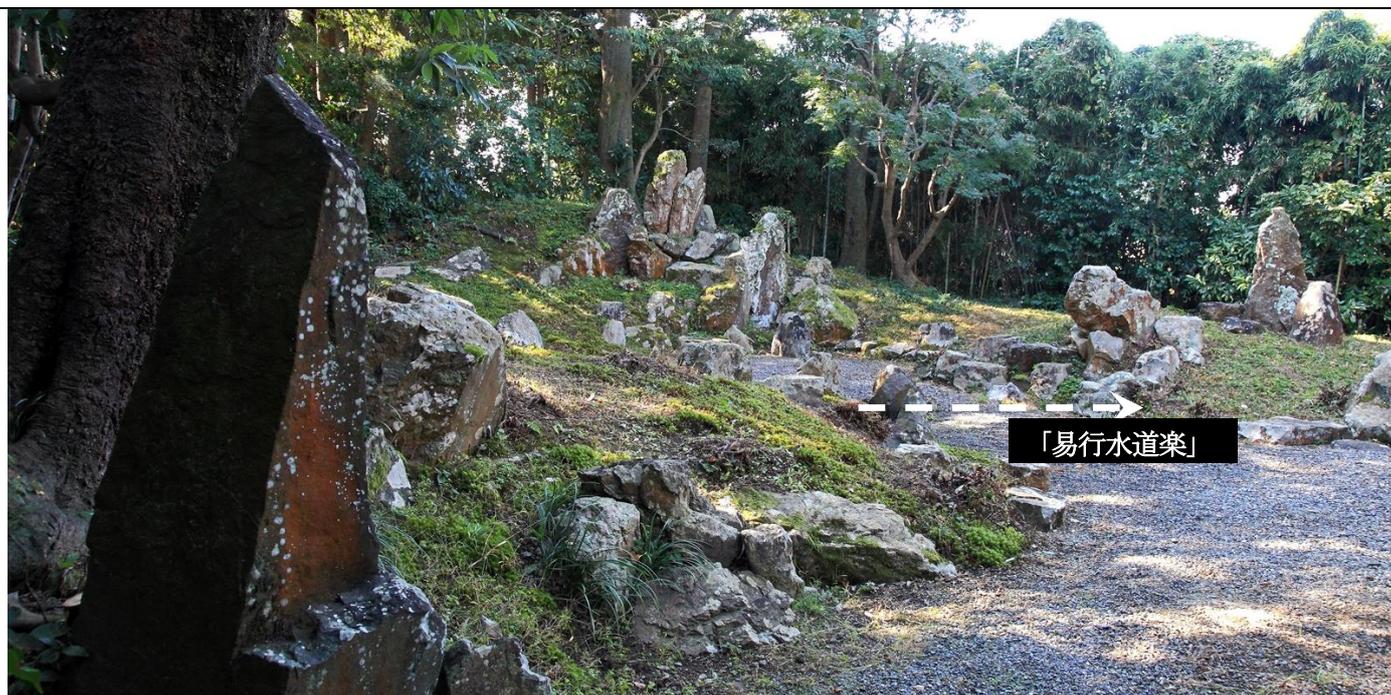


画面左側の長方形の石は「易行水道楽」の小舟を象徴していると推測する

② 福田寺 (米原市)



東から西に向かう「易行水道楽」の小舟を象徴か



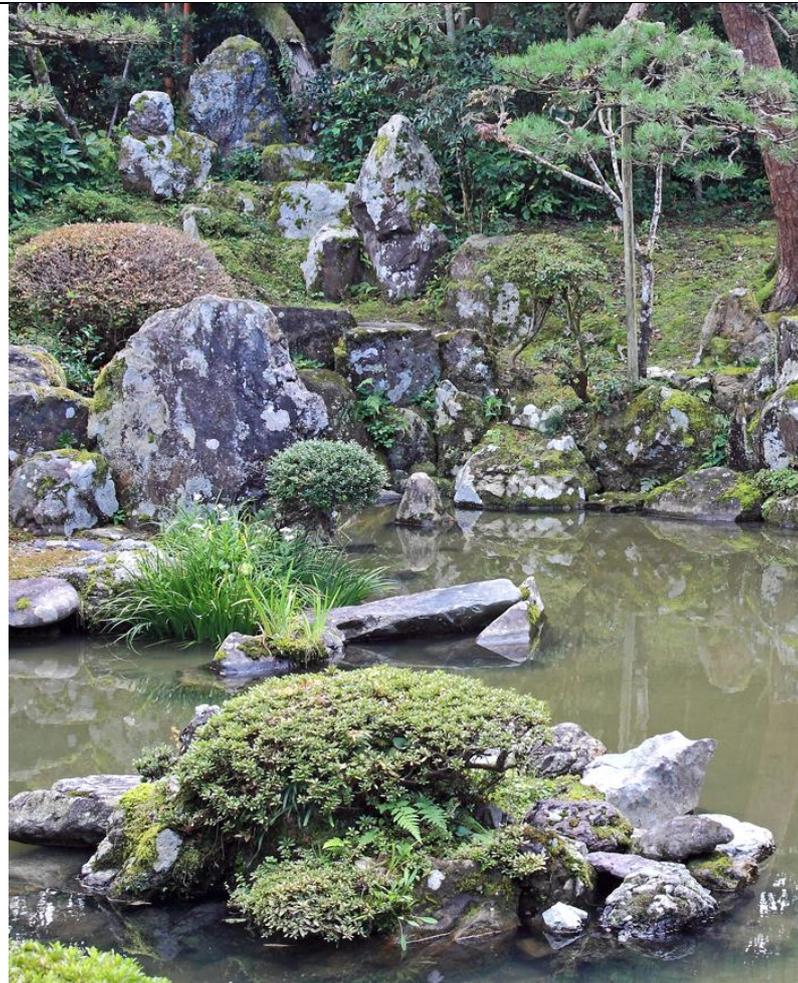
三尊枯滝



③ 赤田家



赤田家庭園中央部



真宗の道場であり「易行水道楽」の説教の庭
その核心となる造形は

「顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽」

難行の陸路、苦しきこと顕示して 易行水道、
楽しきことを信楽せしむ。出典：浄土真宗本願

寺派の『正信念仏偈』

亀島背後にある造形は栈橋を象徴していて、こ
こから小舟に乗って西方の阿弥陀仏に向かうこ
とを暗示している。

『正信念仏偈』の「易行水道」とあるように、阿弥
陀如来の本願を信ずる者は、陸路に行くよりも
船路に行く方が、安楽であることを示唆してい
る。

手前の白蓮華の上の白亀が分陀利華を象徴し
奥の栈橋は易行水道を象徴した説教の庭。

④ 浄土真宗の「二河白道」をモチーフとした桂離宮の庭

浄土往生(おうじょう)を願う者が迷いの世界から極楽に至る道筋を、水・火の二河をもとに説き明かした説話。唐の善導(ぜんどう) (613—681) が『観経疏(かんぎょうしょ)』で記している。



行人は写真向かって背後にある釈迦如来から背中を押され、白い石橋を右側に向かって渡る。

善導の説話では白道の左側の「火の河」は人間の瞋(いか)りや憎しみを象徴し、右側の「水の河」は愛着や欲望を象徴している。

桂離宮の庭では左側の「火の河」は護岸にある燃えるような石、右側の「水の河」は流れ手水で象徴している。橋の手前には行人を追いかける「群賊や悪獣」を表し、その奥にあるベージュの石は釈迦如来を象徴している。行人の辿りつく「極楽浄土」は松琴亭であろうか。



「火の河」を象徴する火炎状の護岸石



「水の河」を象徴する流れ手水



「群賊や悪獣」を象徴する石組



釈迦三尊の発遣を象徴する石

6 真言宗

6.1 真言宗の教理 (出展 <http://www.koyasan.or.jp/fr/>) 日本語版 <http://www.koyasan.or.jp/shingonshu/>)

Religion and Shingon Buddhism

L' école Shingon du bouddhisme suit la doctrine des enseignements du Shingon ésotérique compilés par Kobo Daishi (Kukai) durant la période Heian. « Shingon » fait référence à la vérité révélée par le bouddhisme. Ces enseignements nous apprennent que les mots et l' existence sont inséparables, et que la véritable essence du bouddhisme ne peut être expliquée dans un langage humain. Au lieu de cela, les mots utilisés dans les écritures incarnent le sens profond et des enseignements qu' on trouve dans les phénomènes du monde ; ce sont des indicateurs de la véritable nature de toutes choses. Kobo Daishi nous dit que ce sont ces enseignements ésotériques qui représentent la vérité, et que le bouddhisme ésotérique est le chemin menant à leur compréhension. En revanche, les enseignements exotériques parlent de discerner le sens véritable à partir de la surface des choses à travers le monde. Les enseignements exotériques regroupent les enseignements du Mahayana compris dans les doctrines Hosso, Sanron, Shomon et Engaku.

On peut souligner de nombreuses différences entre le bouddhisme ésotérique (Mikkyo) et le bouddhisme exotérique (Kengyo), mais la distinction la plus fondamentale tient aux pratiques et enseignements du bouddhisme ésotérique, fondés sur la connaissance d' un sens secret et caché. Dans le Shingon, lorsque l' on parle de Sanmitsukaji (les Trois Guérisons Secrètes) et des Sanmitsuyuga (les Trois Yuga Secrets), cela désigne une pratique de méditation visant à se concentrer sur un point de l' esprit (Sanmaji). Les Trois Mystères que sont le corps, la parole et l' esprit du Bouddha (Sanmitsu) correspondent à ceux du corps, de la parole et de l' esprit du pratiquant, qui s' inspirent mutuellement, et les rituels visent à effacer les distinctions qui séparent le Bouddha et le pratiquant. Cette fusion, cette unicité avec le Bouddha est une source de paix de l' esprit, et permettent de libérer cette capacité d' illumination, pour notre propre bénéfice comme celui de tous les êtres sensibles. Kobo Daishi appelle cet état le « Nyuga Ganyu », ce qui signifie « le Bouddha entre en moi et j' entre dans le Bouddha ». Pour Daishi, le bouddhisme ésotérique, qui met l' accent sur les rituels, incantations, le Nyuga Ganyu et la pratique de la méditation, est une meilleure voie d' accès à l' éveil que celles qu' offre le bouddhisme exotérique. À partir de la fin de l' époque de Heian (794-1185) jusqu' à la période de Kamakura (1185-1433), les nouvelles formes de bouddhisme qui se développèrent furent toutes influencées par la doctrine et les pratiques du Shingon, introduisant dans leurs écoles des éléments de doctrine ainsi que des valeurs issues du bouddhisme ésotérique, et c' est notamment pourquoi le bouddhisme exotérique ne se distingue pas aujourd' hui par l' absence de pratiques méditatives, par exemple. Une autre différence entre le bouddhisme exotérique et le bouddhisme ésotérique tient à l' approche et au rôle du Bouddha et des bodhisattvas. Dans le bouddhisme exotérique, le Bouddha et les bodhisattvas sont considérés comme des personnes, qui ont trouvé ou sont sur la voie de l' éveil, alors que dans le bouddhisme ésotérique ce sont des incarnations, l' image physique des vérités des l' univers (Dharma). C' est pour cette raison que le Bouddha et les bodhisattvas sont appelés, dans le bouddhisme ésotérique, le « Hosshinbutsu », ou Corps du Dharma.

Kobo Daishi appelle la méthode d' enseignement direct, sous la forme d' une révélation de la vérité du Hosshinbutsu, ou vérité de l' univers le « Hosshin Seppo » (Prédication du Corps de la Loi). L' espace - temps où l' on peut percevoir directement la sagesse de cet enseignement est à la frontière de la pratique du Sanmitsukaji (les trois guérisons secrètes), c' est-à-dire l' état de Nyuga Ganyu, fusion avec le Bouddha ultime. L' école Shingon, en offrant le Bouddha et son royaume (Hokai) à l' humanité, ancre ses pratiques dans la force mystérieuse que cela donne à l' humanité (kajiki). On met l' accent sur la compréhension de la sagesse du Bouddha et l' accumulation des actes pieux comme moyen de venir en aide aux personnes et de leur apporter le bonheur, et c' est en cela que l' on peut dire que le Shingon est aussi une école bouddhique à l' esprit pratique.

6.2 真言宗の庭

「仁王般若経」の庭 (造庭 1672年 松本市今井)

某家墓地に隣接した場所に、先祖を供養した石組がある。庭園としては異色で存在であるが、中央にある三重の塔が線刻された石を大日如来と見立て、四方には東西南北を意識して阿闍如来(あしゅく)、阿弥陀如来、宝生如来、釈迦如来があり、入口部には獅子(巻き毛)・狛犬(スリムで角あり)と一対の隨身(冠・風折鳥帽子)が彫線刻された石がある。奥の東側には四基の如来名号碑【「南無阿弥陀仏」「南無釈迦牟尼仏」「南無阿闍如来」「南無宝生尊如来】あり、中央の立石には「奉稱讚仁王般若経一千部二世安(楽)」と刻まれた寛文12年(1672年)の石碑がある。

よって、某家の子孫が先祖(某家三郎右衛門)を供養するために「仁王般若経」を読誦した供養の石組である。言わば、真言密教の「立体曼荼羅」と言える。日本には真言宗の寺は多いが、このように教理を視覚化した造形の庭は他には見当たらない、貴重な宗教遺産である。なお庭園として新発見である。



祖先を供養するために、真言密教「仁王般若経」の教理を視覚化した、言わば「立体曼荼羅の庭」



放射光を負った釈迦如来像



狛犬と一対の獅子(巻き毛がリアル)



仁王般若経の通読供養塔

五智如来の立体曼荼羅



五智如来の如来名と方位について

(左写真の金剛三昧院と下の仁王般若経の庭との関係性)

① 如来名

金剛三昧院の不空成就如来に対して仁王般若経の庭は釈迦如来になっているが、度々あること。

② 方位

釈迦如来(不空成就如来)は大日如来の北側にあると、本尊の大日如来を遮ってしまうことになる。

そこで仁王般若経の庭は45度右回りさせ、金剛三昧院は45度左回りにさせている。

よって図像学的には両方正しいことになる。

金剛三昧院 (和歌山県高野町)

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%94%E6%99%BA%E5%A6%82%E6%9D%A5>

和歌山・金剛三昧院多宝塔の五智如来像。中央は大日如来、向かって右手前は不空成就如来。以下時計回りに、阿闍如来、宝生如来、阿弥陀如来。



阿闍如来 (薬師如来) (東)



宝生如来 (南)



大日如来 (三重塔で象徴)



入口



釈迦如来 (北)



阿弥陀如来 (西)

1 当画像は入り口側から四如来を入口に向かって表示した (実物は中央に向かっている)

2 なお、胎蔵界の北方、天鼓雷音如来と同体であると考えられている。また釈迦如来と同一視されることもある。

7 日蓮宗

本法寺 1590 年：日蓮宗の信者である芸術家・本阿弥光悦の作品。



書院から見た全景：手前に「日蓮」の文字をデザイン化した造形、奥には日蓮と・日親を象徴した三尊石がある。



滝添え石は宗祖日蓮と開山の日親を表し、斜めの石は虹色の滝で日蓮の発する仏法を象徴しているか。当庭は日蓮宗の信者であり、画家でもある本阿弥光悦によって作られた三次元絵画とも云える。



滝の前には入江があり、そこに石橋が架かっている。



半円形の石を合わせ「日」とした。



直方形の 10 本の石材による蓮の造形は日蓮の「蓮」を象徴した。左写真と合わせて見ると「日蓮」を象徴していることが解る。

日蓮宗の信者である本阿弥光悦の作品